義太夫入りの『復活』なんかは、はばかりながら、抱月さんも御存知あるめえ。抱月さんばかりぢゃねえ。ヨーロッパでも、アメリカでも、こいつを知つてる奴は一人だつて有りやァしめえ。だから西洋講談は天下一品だつてえんだッ……。

『おい〳〵、何をそんなに威張るんです。君は脱線するから可けないよ』……『さうですかい。脱線しちやァ可けませんかな』……『可けませんよ。改めて出直しなさい』……『出版屋の都合がありますから、出直す譯には參りませんて。それではこれが丁度トルストイ先生の原作で、第一編の終りですから、第二編から眞面目にやりますから、どうぞ御勘辯を』……『よろしい、承知しました』

といふやうな譯合で、本回も無事に鬼がついたか……ヤレ〳〵。

二〇、故郷の廢家

お約束でありますから、本回から眞面目に演述いたします。

さて、マスロワの裁判は二週間以内に元老院で開かれる模樣でありましたのでネフリユドフは、それまでにペテルブルグに出向いて、若し控訴が棄却されたらば、陛下に上奏しやうといふ考へ。それに此裁判の結果は、マスロワ始め多くの囚人が、六月の初めにはシベリヤへ護送される事になるかも知れませんから、何處までもマスロワと同行して行けるやうにするには、豫め諸所の領地を見巡つて萬端の始末をしておかなければなりません。そこで、ネフリユドフは先づ第一にクスミンスキー村へ行くことにしました。此村は、ネフリユドフの所有地の大部分を占めて居ります。

クスミンスキー村へ着きましたるネリユドフは、停車場で二頭立の百姓馬車を傭ひました。此馬車の馭者といふのは、至つて話好き。自分等の土地の地主さまを乘せてゐるとは知りませんから、頻りとクスミンスキー村の差配人の惡口を言ふ。

●者『日那、あいつ見たいな虚榮坊は有りやァしませんや。栗毛の馬車馬を三匹も買ひ込みやがつて、お前さん、夫婦合乗りと洒落込みやァがつて、ヘッ！ヘッ！クリスマスの時なんかァ、家ん中え立派な飾り物をしやがるんでがす。わッちがお客を送つて行ましたがね、クリスマスッリーとか言やがつて、大きな木の枝へ持つてッて、電氣の玉の小さい奴を、何十ッて括りつけやがつて、此村ぢやァ何處え行つたつて、あんな剛勢な眞似をする奴やァ、一人だつて有りませんや。奴さん、しこたま地代をチョロまかしやァがつたッてえ評判ですよ』

ネ『悪い奴だな』

馭者『ところが、日那。その虚榮坊の話ですがね。この村の地面を持つてるネフリユドフとか、氷と豆腐とか言ふ若僧が、お前さん。途方もねえ悪でね……』

ネ『へえ、さうかい』

馭『何とかいふ女郎に自由廃業をさせやがつた。ところが女は警察に取押まつて

監獄へ抛り込まれたんでさあ。すると、その氷り豆腐がね』

ネ『うむ〈〈』

馭『監獄へお百度を踏みやァがつて、駈落の相談をしてえるところを、役人に見つかりやがつたんでさあ』

ネフリユドフ先生、苦い顔をして聞いてゐる。馭者は益々調子に乗つて、可い加減なことをベラ〈〈と喋る。

馭『で、とう〈〈其男がシベリヤへ流されるてえことになつたんでさあ』

ネ『さうかな、悪い奴もあればあるものだな』

あんまり出鱈目すぎて、ネフリユドフも腹を立てられない。

とかくする中に馬車は差配所に着きます。ネフリユドフは其晩は差配所に一泊いたし、翌朝九時に床を出ました。

窓から覗いて見ると、蒲公英の一面に生えてゐるテニス、グラウンドに百姓達

が、段々と集まつて來るのが見えました。昨夜蛙が盛んに鳴いて居りましたのに天氣模樣の變る前兆でありましたでせう。今日は朝から空がどんよりと曇つて、そよとの風もなく、やがてしめやかに温かい雨が降り出して、木々の小枝や葉末や叢にしと〳〵と注いで居ります。

衣服を着換へながら、ネフリユドフは百姓達を眺めて居りました。すると、差配人が部屋へやつて參りまして、

差『御前さま、百姓共も大概集まりまして御坐いますが、お食事の濟みますまで待たせて置きますで御坐います。へえ』

ネ『いや、直ぐ行つて、みんなに逢う事にしよう』

ネフリユドフは早速差配人を連れて外面へ歩み出た。虎の威を借る狐の譬へ。元來が剛慢な差配人も今日は一段と横柄な面つきをおして居ります。

差『これ〳〵、みんな耳の穴をほじくつて聽くんだぞ。今度公爵樣は特別の思召

しを以て、お前等に極く安く地面を貸してやらうと仰しやるのだ。だが、お前等は、このやうな御恩に與る資格のないものばかりだのう』

甲『あんで、こちとらが資格がねえと言はつしやるだ。こちとらが無精べえしえると思ふだかの？先の大奥樣には、ハア、えれえ御恩になつてるだが、今度の公爵樣だつて、わし等をば見殺しにはさつしやるめえ』

乙『わし等は、ハア、御主人樣に逆うちう事は、爪の垢ほどもねえだが、地面の不足を、あんとかして頂くべえと、ハア、そいつをお願ひ申したばかりぢやねえか。のう、李兵衛どんや』

ロシヤの事ですから、李兵衛なんて名前は御坐いませんが、便宜上から致しておきます。ネフリユドフは一同を見廻しました。

ネ『さうであらう。それでお前達を呼んだのだ。私はお前達さへ可いなら、土地を全部貸してやる』

丙『あんでがす。地面をそッこら貸して下さるとね？』

ネ『さうだ、極く安い地代で貸してやる』

丁『もッけもねえ好い事だのう』

丙『さうよ　どうせ、こちとらァ土を掘ぢくッて暮しを立ててるんだからなァ』

甚『だから、これからは、みんなよく稼いで、キチン〳〵と地代を納めるようにしなさい』

甲『そりや廉くさへしてくんなさりやァ、滞りなく拂うことにしべえよ。こちとらァ有つて拂はねえといふ譯ぢやねえでがす』

ネ『可し、可し、私はお前達の利益を圖る爲めに此村へ來たのだ。よく此人ども相談して、貸借の條件を定めなさい』

結局、百姓等は近所のどの村よりも三割方廉く土地を借りることが出來たのであるから、滿足する筈でありますが、どうも心から滿足はしてゐないやうである

その上匡もまだ何か望みがあるやうに見える。それが自分に分るので、ネフリユドフは何となく不愉快で仕方がない。これだから、金持ちは、誠に割が合はない。

クスミンスキー村を引上げまして、ネフリユドフは伯母から讓られた領地の方へ出掛けました。これは始めてカチューシャと逢つた想ひ出多き土地であります

ので、ネフリユドフが此土地へ出掛けて參りましたのは、土地の處分といふ用件ばかりでははない。カチューシャの事や、二人の仲に出來た子供の消息をも探つてその子供の生死を明かにしたいといふ心底であります。

ネフリユドフは早朝にバノーヴォ村に到着いたし、停車場から馬車を傭つて、眞直ぐに伯母の家へと急がせました。伯母の家へ着いて見て、先づ驚いたのは、その建物のひどく古びて、荒れ果てた有樣、鐵板の屋根は何處も彼處も眞赤に錆び、四五枚まくれ上つてゐる。執事の部屋も臺所も厩も、化物屋敷のやうに煤けて薄暗くなつてゐる。それでも庭園だけは、どうにか斯うにか昔の面影を留めて

居ります。十二年前に、ネフリユドフが十六歳の少女のカチューシャと初戀に落ちた、其のライラックの藪は昔と同じ白い綺麗な花を咲かせてゐる。『年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず』とか申しまして、花は昔の通りでありますが人は何と言ふ變り方でありませう。ライラックの花のやうに淨かつた少女カチューシャは、何年の間泥水稼業をやつて、その揚句に獄屋の人となつてゐる。ネフリユドフは、母屋の小さな窓に凭れて、庭を眺めながら、少時は深い感慨に沈んで居りました。

停車場からネフリユドフを送つて來た辻馬車屋が、幾干かの酒代を貰つて、馬車の鈴をカラン〳〵鳴らしながら歸つてしまうと、あたりが急に靜寂となる。和らかな春風が、新しく拂り返した土の香を吹き送つて來る。すると、『トラッパトロップ、トラッパトロップ』といふ音が川の方から聞えて來ました。これは布を洒してゐる女達が、拍子を取つて布を叩く音です。

ネフリユドフは此情景に浸つて十二年前の當時を追想して居りますと、今の自分が昔と同じに若々しく純潔であり、昔と同じに立派な希望に充ちてゐるやうに思はれて來ました。けれども、自分は何の用事で此處へ來たかと、不圖考へついた時、彼の美しい聲は醒めて、暗い淋しい大きな谷が、昔と今との間に横はつて了ひました。

その時部屋へ這入つて來ましたのが、此家の留守を預つてゐる男。

男『お食事は何時頃に召しあがりますか』

ネ『お前の都合の好い時で宜しい。別に欲しくもないから、その前に村を一巡りして來やう。それはさうと、お前はマトリヨーナ、ハーリナといふ女を知つてゐるか』

男『はい、存じて居ります。酒の密賣なぞをやつて居ります。私も時折小言を言つてやりますのですが、なにぶん生計に困つて居りますので……』

ネ『何の邊に住んでゐるのかね。私は一寸會つて來たいんだが』

男『村端れから三軒目の手前の家でございます。なんなら御案内いたしても宜しう御坐います』

ネ『いや直ぐ分るだらう』

ネフリユドフは家を出掛けて、村端れの方へと歩いて參ります。

二、男の親切

程なく着きましたのが、マトリヨーナ婆さんのあばらやの前。案内して呉れた村の子供を外面へ殘して、ネフリユドフは扉口から這入る。奥行二間半程の汚い部屋に一臺の寢臺が据えてあります。

『此寢臺の上で、カチユーシヤは子供を生んだんだな』とネフリユドフは少時考へ込んでゐる。

機織機械の前に腰掛けて、物領の孫娘と一緒に機絲を揃えて居りました婆さん近頃は空巣ねらひが此邊を徘徊してゐるから、氣を付けろと、お巡りさんから注意されてゐたか何うか、その邊の事は分り兼ねますが、何しろウロンな男がやつて來たなと、ジロリ〳〵ネフリユドフの顔を見ながら、

婆『お前さんは誰に用があるんだね』

ネ『私は此邊の地所の持主だが、お前さんに話したい事があつて來たんだ』

言はれて、婆さんは眞青になつて、

婆『あれまあ、旦那さまで御坐りましたか。飛んだ不調法な口を利きやして、すみましねえで御坐りやす。どうぞ御勘辨下さいましよ。通りかかりの旅の衆かと存じやしたんで』

ネ『勘辨なんて、そんな事を言はないでも可い。實は内々でお前に訊きたい事があるんだが』

婆『さうで御坐りやすか。其處は端近いさ先づあれへ』そんな事は申しません。

『すつとお通りなすつて下さりませ……餓鬼共、何をぢろ〳〵見てけつかるんだ打ッぱたくぞ。戸を閉めねえかい』

戸口から覗いてゐた子供達は、驚いて逃げ出した。

婆『旦那さま、よくまア御親切にお訪ね下さいましたよ。汚い椅子で御坐りやすがお掛け下さいましよ。まア、あなた樣も御年をお取りなすッた。あんな若さまが、かうまでお變りにならうとは、想ひもよりましねえ。何しろ一むかしになりますから、其間には、旦那さまも色々御苦勞を遊ばしたかね』

ネ『まあ、その苦勞のために、出て來たやうな譯だがね。お婆さんは、カチューシャを覺えてゐるだらうね』

婆『覺えてゐる段ぢやア御坐りましねえ。私の實の姪で御座りますもの。彼女の爲めには私は、どれほど涙を流したか知れませしねえ。彼女の事なら、私は何で

も知つて居りやす。のう旦那さま。神さまの前へ出れば、誰だつて罪は御坐りやす。若い時にやア誰だつて惡戲をするもんです。ですからの、貴方樣がカチューシャと惡戲をしたからッて、百ルーブルもお金を出してやんなさつたから、それで帳消しで御坐りやす。だが、彼女は何といふ不所存もので御坐りやせう。實の姪でも愛想がつきやした。大奧さまのお邸を追ん出てからと言ふものは、諸々方方うろ付き廻つて、揚句の果は、旦那さま。手前の尻を賣つて贅澤三昧をしようなんて、大それた料見を起しやしての」

ネ『子供は何うしたね。此の家で產をした相ぢやないか。子供は何處にゐるんだ』

婆『赤ン坊で御坐りやすか？彼女の產後の日立ちが惡くつて、到底癒りさうもありましねえので、私や赤ン坊を養育院へやりましただ』

ネ『すると、養育院の番號は取つてあるかね』

婆『はい、番號は取つて御坐りやす。ところが、旦那さま、赤ン坊は間もなく死

んぢまひました』

ネ『どうだつたい、子供は繻緞好しだつたかね？』

婆『え、、それはもう、金の草鞋で探したつて、あんな可愛らしい赤ン坊は、まだと見つかりましねえだ。旦那さま、あなた樣にそツくりでね』

ネフリユドフが吾子の事に就て知り得たのは、これだけでありましたが、子供が死んだのも畢竟自分がカチユーシャを見捨てて置いたからだと思ふと、ネフリユドフは言ひ知れぬ怖ろしさと悲しさを感じたのであります。

ネフリユドフは、再び伯母の家へ引返し、小作の百姓達を呼び集めて、クスミンスキー村でやつたやうに、地所の一件を始末し、そこ〳〵に都へ歸りました。

その翌日、ネフリユドフは、早朝に家を出て、監獄の近所に極く質素な下宿屋の部屋を二間借入れ、必要な道具類を其處へ搬ぶやうに家の者に言ひつけて置いて、辯護士の事務所に訪れました。それは放火犯人として牢屋に這入つてゐる例

のメンショフ婆さんの辯護を依頼してあつたからです。

辯護士と色々相談をして、それからネフリユドフは辻馬車を備つて、典獄の官舍へ驅けつけました。

ネ『マスロワには何時面會が出來ませうか』

典『病院の方へ行つて居りますから、何時でも面會が出來るでせう。向ふへ行つてお尋ねになつたら可いでせう』

といふ譯で、ネフリユドフは監獄病院の小兒科病室へ案内される。丁度廊下を通り掛つたのが、石炭酸の匂ひをぷん〳〵させた若い醫員。

醫『君は誰に用事があつて來たんです？』

對手を眼下に見下して、横柄に訊ねました。どうもこの役所の雇員とか、書記とか言ふ連中には、横柄な先生がゐて困ります。とり別け日本のやうな官僚國には、この弊害が著しい。役場へ出産届でも持つて行つて御覽なさい。係りのお

役人、なた豆の煙管か何かで悠々と莨を喫ひながら、同僚と世間話をして御坐る。

『君、米が大分安くなつたね』

『うむ、米は安くなつても、外の物が下らないから、駄目だよ』

『君のとこでは小人數だから、そんな事を言ふが、僕のところは、大助りだ』

『さうか、幾人だつけね。君のところの子供は』

『半ダースさ』

『半ダースも拵えるには、これで相當に骨が折れたらう。男の子と女の子と、どッちが多いね』

『男ばかりだよ』

『それなら大に賀すべしだ。男の子は國家の干城だからね』

下らない事を、いつまでも喋つてる。際限がないから、此方でも恐る〳〵催促を致します。

『誠に恐れ入りますが、此の届を一つお願ひ致したいもので、實は三十分程前から待つて居りますので……』

待つてるのは貴樣の勝手だと言はないばかりの顔を、お役人さまが此方へお向けになる。

『何だ、出産届』かとぼーんと届書を机の上へ投り出して、また煙草を二三服。

『届はそれで宜しいので御坐いますか？』

『うむ、出産届か。すると、君の所で子供が生れたんだな……この届書では可かんよ。未だ父母では可かん。父は男、母は女と書き入れなさい』

『父は男に極つて居りますから、別に書き入れないでも……』

『生意氣な事を言ふものではない。規則です』

仕方がないから字を書き入れて恐る〳〵差出すと、

『これでは可かん。字を書入れたら、上の方に一字挿入と書かなければ可かん』

『へえ〳〵これで宜しう御坐いますか』

『可かんよ。一字挿入と書いたら、認印を押しなさい』

『認印を忘れて參りましたので……』

『なに、認印を忘れた。さういふ不注意だから君は子供ばかり拵えるんだ』

そのくせ御當人は半ダースの子持ちです。此等が官僚式とか、繁文縟禮とか申しまして、誠に困つた習慣で御座いますす。

餘事を申上げて恐縮です。若い醫員に横柄に出られて、吾々ならば小癪に障る所ですが、過去の罪が噴はうといふ殊勝な心掛けを起したネフリユドフですから、そんな事には驚かない。

ネ『マスロワと言ふ女に逢ひたいのですが』

醫『此處に女は居ない。此處は小兒病室と言つて、小兒患者を收容する所である』

大隈さんの眞似をしてゐる。

ネ『それは私も知つて居ります。しかし、女囚が一人手傳ひに參つて居る筈ですが』

醫『ああ、それなら二人ゐる。その一人がマスロワと言ふのかね』

ネ『さうです。その女の事件で、元老院へ控訴狀を出す爲めに、私はこれからペテルブルグへ參る所なんですが、一寸その女に逢つて、これを渡したいと思ふんです。これには寫眞が一枚入れてあるだけです』

對手が只の男ではないと氣が付いて、醫員先生は急に言葉を改め、

醫『さうですか、それなら早くさうおッしやれば可いのに……あ、マスロワは彼處へ來ましたよ』

年寄りの看護婦の後に跟いて、廊下を歩いて來たマスロワは、ネフリユドフを見ると、さッと顏を緋くして、立ち停りました。

ネ『私はこれからペテルブルグへ行く。これはバノーヴォ村の伯母の家に看附けだんだよ。お前が喜ぶだらうと思つて、持つて來た』

マ『あら、寫眞?』

マスロワは別段嬉しい顏もせずに、寫眞をエプロンのかくしへ納ひました。

ネ『お前の伯母さんに逢つて來たよ』

マ『さう?』

ネ『此處は何うだい。檻房にゐるよりか可いだらう』

マ『ええ』

ネ『メンショフ婆さんも、どうやら放免になりさうだ。辯護士の話では』

マ『いろ〳〵お世話さまです』

ネ『お前の再審はもう直ぐだらうが、どうかして宣告が取消しになれば可いがね』

マ『さぢやア何方でも同じですわ』

男の方では一生懸命に心配してゐるのに、女の方は至つて冷淡。これでは張り合ひがありません。

ネ『何故おんなじなんだ?』

女の樣子が妙だと思つて、ネフリユドフは少しく鋭く問ひかけました。

二二、悲慘な過去

『なぜ同じなんだ?』と訊ねたネフリユドフの心の中を、カチユーシヤ、マスロワは如何に讀みましたらうか。其處は男相手の稼業をして來ただけに、悟りが早い。

マ『さうぢやありませんか』と、マズロワは、物問ひたげな一瞥を男に投げました。

ネ『私には分らない。私だけの事なら、お前が放免にならうと、なるまいと、そ

れは同じだらう。しかし、私は先日も言つた通り、是非お前と結婚しやうと思つてるんだ』

言はれてマスロワは、嬉しげは男をじッと見詰めましたが、相變らず、冷淡な調子で、

マ『その事ならもう仰つしやらない方が宜しう御坐いますわ』

ネ『お前がよく分つてくれるやうに、私は言ふんだ』

マ『何もかも既うさんぐおッしやつたぢやないの』

嬉しいのを無理に抑えて、態とぞんざいな口を利く。

その時、病室の方から、子供の泣聲が聞えました。

マ『あ、私を呼んでるですわ』

ネ『ぢやア之で別れやう』

ネフリユドフが握手を求めると、マスロワはそれには氣がつかない振りをして

さッさと廊下を駆けて行つてしまひました。

さあ分らない。マスロワは嬉しさうでもあり、冷淡なやうでもある。自分と結婚することを喜んでゐるだらうか。喜びながら自分を試さうといふのだらうか。それとも結婚するのが厭なのだらうか。とネフリユドフは色々に思案をめぐらしましたが、どうも女の心が分りません。しかし、その心の中に著しい變化が起りかけてゐるといふ事だけは、ネフリユドフにも分りました。さうして此變化の起りかけた事を、彼は非常に嬉しく思つたのであります。

扨て、ネフリユドフと別れて、病室へ取つてかへしたマスロワは、看護婦の吩咐通り、一人の子供の病床に近いて、ベッドの被覆をかけ直し、それから隅の方の椅子に腰をおろして、先刻の寫眞を封筒から半分抽き出して、懐かしさうに眺め入るのでした。間もなく日が暮れて、其日の勤務も濟み、當てがはれた部屋に唯一人引籠ると、今度は誰に遠慮もなく、寫眞をすッかり抽き出して、其處に寫

つてゐる人々の顏から、着物、背景になつてゐる木の茂みと、一ッ〳〵に細かく眼を落しながら、いつまでも〳〵古い寫眞を凝視ました。さうして、十二年前の自分の若い美しい顏を見ると、何とも言へぬ懷しさを覺えずにはゐられませんでした。其處へ這入つて來たのは、同室の看護婦で、丸ポチヤの至つて氣の好い婦人。マスロワが恍惚と寫眞に見とれてゐるのを見付けると、さし足ぬき足、後ろへ窺ひ寄つて、いきなりポンと背中を叩きました。

マ『あ、びッくりした』

看『ほ、ゝ、ゝほ。あの方が持つて來たの？それは誰れ？貴女なの？』

マ『え、』

看『それから其の男の人があの方？それからそれが彼方のお母さんなの？』

マ『い、え、伯母さんなの。貴女この若いのが私だと直ぐ分つて？分らなかつたでせう？』

看『え、分らなかつたわ。ずゐぶん變つたのね、貴女は』

マ『十何年も昔ですもの。一生涯も昔ですもの』

晴れやかであつたマスロワの顏が、急に曇つて、眉と眉の間に深い皺が出來ました。丸ポチヤの看護婦は不思議に思つて、

看『なぜ、そんなに鬱ぎ込むの。その時分貴女は面白おかしく日を送つてたんでせう』

マ『まあ、面白おかしいなんて！地獄よりかもッと慘めだつたわ』

看『どうして？』

マ『どうしてッて、もう昔の事は訊かないで頂戴、後生ですから』

マスロワはテーブルの抽出しへ寫眞を納ひこんで、込みあげて來る涙を抑えられなくなつて、部屋を飛び出しました。

寫眞に映つた昔の面影を眺めてゐる時、マスロワは若かつた其日を想ひ出し、

其の頃の自分の幸福を追想しました。さうして又これからネフリユドフと一緒になれば、その幸福を取戻すことが出來るか、どうだらうかと、思ひ迷つてゐたのであります。ところが、仲間の看護婦の言葉は、マスロワをして急に現在の境遇を想ひ起させました。みじめであつた遊女生活がまざ〳〵と想ひ起させました。

その頃の恐ろしい夜の記憶が、かうまで明瞭に描き出されたのは、今までについぞない事でありました。別けても謝肉祭の或る晩、自分の身受けを約束した或る學生の來るのを待つてゐた其時の事が一番はッきりと描き出されました。

その晩、マスロワは、酒のシミで汚れた赤い絹の服を着け、亂れ髪に赤の花リボンを挿して、お客を送り出してから――それは、もう朝の二時頃でありましたらう――疲れ切つて、さうして可なり酒に醉つて、舞踏室のビヤノの側へグッタリと腰をおろしたのでした。その時、傍には雀斑だらけの、骨ばつた顔のビヤノ彈きの女が腰かけてゐた。その女を對手にマスロワは互に身の上話を始めました

其處へ不意に這入つて來たのが仲好しのベルタといふ朋輩。この女も慘めな境界を嘆いて、三人は何とかして其處を逃げ出さうといふ相談になりました。所謂自由廢業の相談です。妓樓を逃げ出すには持つて來いの時刻。いよ〳〵相談が纏まつて、三人しめし合せて飛び出さうといふその時に、醉ひどれ客がどや〳〵と登つて來た。最先に舞踏室へ飛び込んで參りましたのが、燕尾服に白ネキタイの小柄の男、酒の臭をぷん〳〵させて、しやッくりをしながら、いきなりマスロワに抱きつく。今一人は鬚の生した、でぶ〳〵男、此奴はベルタに抱きつく。ピヤノ彈の女もぼんやりしてはゐられませんから、『雨しよぼ』乃至八木節と言つたやうな、まあ、日本で言へばさう言つたせい〳〵挑發的な俗謠を彈き始める。それに合せて、跳ねる、抱きつく、酒をあほる、又た跳ねる……。

ああ、自分は幾年も幾年も、あんな生活を續けたんだ。どうして、あんな慘めな生活を變へることが出來なかつたらう……かう思ふとマスロワにはネフリユド

フが怨めしい。自分がさうなつたのも、元はと言へば皆なネフリユドフのお蔭だ！

ああ、くやしい！私は何故先刻逢つた時に、これを言つてやらなかつたらう？他を玩具にしておいて、今になつて結婚だなんて！昔のおぼこ娘ぢやないわ。誰が自由になるもんか！ああ、お酒がほしい！

よごす涙の白粉の、その顔かくす無理な酒。一旦は禁酒と決心したものの、又たやけ酒がほしくなつた。しかし、病院では、助手にでも頼まなければ、酒は手に這入りません。さらばと言つて、そんな事を頼まうものなら、日頃からうるさく附纏つてゐる若い助手が、何を言ひ出すかも分らない。男ッてものは何うして斯うだらう？

マスロワは病院のつめたい廊下にペッたりと坐り、すさび果てた自分の生涯を考へて、とめどもなく啜り泣いたのであります。

二三、おさな馴染

マスロワが病院の廊下で泣いてゐるとは知らないネフリユドフは、マスロワが結局結婚を承諾するに違ひないと思ひ込んで、喜び勇んで吾家へ立ち歸り、翌日はマスロワの控訴やら何やらの用件を帶びて、いよ〳〵ペテルブルグへ出發することに相成りました。

マスレンニコフ夫人の在宅日に訪問してからといふもの、ネフリユドフは上流社會に對して心から嫌惡の情を感じたのであります。上流社會といふものは、何處の國も同じこと。少數者の安逸と享樂を保全する爲めに、多數の人口が被る悲しみや苦しみを巧みに塗りかくしてゐる社會であるます。上流社會に屬する人々は、自分の生活が如何に殘忍であるか、邪惡であるか、といふことを悟らない。自分の生活の爲めに多くの人々が悲惨な目に逢はされてゐるといふことを悟

らない。かう分つて見ると、ネフリユドフは既う平氣で上流社會に交つて行くことが出來なくなりました。しかし、それでも其社會に親族があり、友人があつて見れば、さう直ぐに關係を斷つことも出來ず、それにマスロワや其他の不幸な人々を救はうとするには、忌々しいながらも、上流社會の人々に賴つて、その助力を乞はなければならないのであります。

ネフリユドフはペテルブルグへ着くと、眞直ぐに伯母に當るカテリーナ伯爵夫人の家へ馬車を驅りました。伯母の家に逗留することは、取りも直さず、大嫌ひな上流社會に身を投ずることでありまして、ネフリユドフはそれが不快で溜りませんが、何事もマスロワの爲めと觀念して、暫く其家に起き臥しすることに決心したのであります。

伯母さんのカテリーナ夫人は、ネフリユドフが近項頻繁に監獄へ訪れることを風の便りに聞き及んで居りました。

夫人『お前は一體どうしたのだい。噂に聞けば、監獄の方へ大分足が向くさうだが、そんな事をして、罪人でも救ひ出さうといふのかえ』

ネ『い、え、どうしまして、そんな氣は少しもありません』

夫人『そんな氣がないッて？善い事ぢやないか。でも、それには何か仔細があるだらう？そのお話を聞かして貰はうぢやないか』

自分の心に疚しい所があるのなら、かう言はれて打明けられるものではありませんが、今のネフリユドフがマスロワに對する態度は眞劍です。浮氣や道樂ではありません。そこでネフリユドフは、マスロワとの關係を殘らず伯母さんに打明けました。

夫人『さう、さう、想ひ出したよ。お前のお母さんが其話をおしだつけ。私はお母さんは彼娘をお前と結婚させることとばかり思つてたよ。それが、ああいふ不料見の女さ。お前は今でもあの女が可愛いのかえ』

ネ『い、え、可愛いとか何とかいふのは昔の事ですよ、伯母さん。私は今は彼女を救つてやり度いと、そればかりに氣を揉んでゐるのです。あの女が何の咎もないのに罪を負はされてゐるのも、つまり私の事から、ああいふ不幸な境遇に落ちるやうになつたのです。ですから、私は力の及ぶ限り盡してやるのが、自分の義務だと思ひます』

夫人『でもお前は其女と結婚する積りだとか聞いたけれど、それは眞實かえ』

ネ『え、、私は其積りです。しかし、女の方で承知しません』

チャールスカヤ夫人は斯う聞くと、驚いて眉を擧げ、少時はじッと甥の顏を見守つて居りました。

夫人『まあ、さうかえ、すると彼女はお前よりは悧巧だよ。お前は何といふ馬鹿だらう。ほんたうに結婚するつもりだつたのかえ』

ネ『ほんたうですとも』

夫人『あんな生活をして來た女とかえ？』

ネ『あんな生活をしたのも私が原因なんですから、尙ほ更らの事です』

夫人『お前の馬鹿にも呆れるね。でも、私はお前のその馬鹿なところが好きなのさ。好い事があるよ。私の知つてるアーリンといふ人が廢業娼妓の世話をしてゐるから、お前さんの女も、其處へ預けては何うだね』

ネ『しかし、カチユーシャはもう西比利亞へ流されることになつてるんです。それに就いて、私は控訴の手續をしやうと思つて、伯母さんにお願ひしに來たんです』

夫人『まあ、何處へ控訴するのさ』

ネ『元老院へ』

夫人『さうかえ。元老院は人達は、家の伯父さんが皆な御存知だから、頼んであげても可いけれども、詳しい事はお前からお話したら可からう』

ネ「どうぞ、お願ひ致します」

それからネフリユドフは、要塞の監獄に這入つてゐる青年の母親が、息子に逢ひたがつてゐるので、その面會の許可を得てやり度い、といふことも話し、要塞監獄を管轄してゐる人物の妻君に紹介を書いて貰ひました。

こんな話をしてゐるところへ、折よく伯爵が這入つて參りました。これは前國務大臣、陸軍大將で、前關白大政大臣ぐらゐの長い肩書を持つてゐる人物。默つて、ネフリユドフの聞を聞いて居りましたが、

伯「よろしい、紹介狀を書いてやらう。今お前が話したフヨードシヤの事件は、わしも非常に感動した。此事件に就ては、折を見て皇后陛下に上奏してやらう。が、しッかり約束は出來んぞ。兎も角も規定の形式に依つて請願書を出すが可い」

かう言つて伯爵は紹介狀を二通かいてくれました。そこでネフリユドフは此二通と伯母から貰つた一通とを懷ろにして、早速訪問に出掛けました。

第一に訪れたのが、マリエットと言つて、要塞監獄を管轄してゐるチエルビアンスキー將軍の夫人。此マリエットとネフリユドフは、子供の時分に友達でありました。

綺麗な、さッぱりとした辻馬車は、綺麗な大通りを威勢よく走つて、宏壯な邸宅を幾つか通り越して、マリエットの邸へネフリユドフを運んで參りました。見ると玄關の扉の前には、英國風の馬具をつけたる英吉利馬の二頭立ての馬車が待つて居る。仕着せ服を着け、頰髭を生やした英國人らしい馭者が、鞭を持つて勿體ぶつた馭者臺に控えて居る。

玄關にかゝつて案内を賴むと、華奢な制服を着た戸口番が、恭しく扉を開けてネフリユドフを玄關の間に案内しながら、

「閣下は今日は御面會を御斷りでございます。それから奥樣も御面會を申し上げ兼ねます。只今御出掛けになる所でございまして……」

ネフリユドフは失望して、テーブルの上の訪問帳へ名前と用件を書き殘さうとペンを手に執りましたが、丁度、其時二階の階段を足早に降りて來た小柄なやせぎすの貴婦人。外出と見えまして、鳥の羽を飾つたつば廣の帽子を被り、黒の衣服に同じく黒のケープを羽織り、新しい黒の手袋をはめて居る。

ネフリユドフの姿を見付けると、婦人はヴエールを擧げて、美しい顏を見せ、口元に微笑を浮べました。

『あら、ネフリユドフ公爵。私お顏を覺えて居りますよ』

ネ『え、私の名まで覺えてゐらッしやるんですか』

十幾つの時から一度も逢つたことのない婦人が、自分の名を記憶してゐてくれるかと思ふと、其處は人情で、惡い氣持はしません。

マ『え、覺えてゐますとも。だつて私は昔貴方を愛してゐたことがあるんですもの。でも、ずゐぶんお變りなすッたね・・・・私丁度出掛けでゆゐりとお話してゐら

れませんけど、一寸ぐらゐ構ひませんわ。その代り今夜か明日、是非ゐらして下さいましな。きッとですよ』

ネ『今夜は上がれません。しかし、私は貴女にお願ひしたいことがあるのです』

マ『何の御用ですの？』

ネ『伯母からの手紙を持つて來ました。これでも、此中に委しく書いてありますから』

ネフリユドフが伯母から貰つた紹介の手紙をマリエット婦人に手渡しますと、夫人は早速封を切つて讀みました。

マ『あら、伯爵夫人は、私が良人の仕事を自由自在に左右すると思つてゐらッしやるんですがね、それは間違ひですわ。しかし、夫人や貴方のためには、私出來るだけお出話いたします。その御用件といふのは、どんな事ですの？』

ネ『伸ではありませんあるある娘が要塞の監獄に入れられて、病氣になつてゐん

です。ところが其娘は何の罪もないのですから、どうぞ放免になるやうに御主人へ御盡力が願ひたいんです」

マ『その娘の名は何と申しますの？』

ネ『シューストワです』

マ『よろしう御坐います。出來るだけは御世話いたしませう』

マリエット夫人は身輕に馬車に飛乘つて、傘をひろげましたが、ネフリユドフの方へ振りかへつて、

『きつと入らして下さらなければ可けませんよ。きッとね、御用の事ばかりでなしに』

誘惑するやうな艶やかな微笑を含んで、夫人はぢッとネフリユドフを見ましたそれから顏にヴエールを掛けて、手に持つたパラソルで輕く馭者の背中に觸りながら、『さあ、可いよ』ネフリユドフは帽子を揚げる。栗毛の馬が、靜かな鼻息をつきながら、敷石に蹄の音を立てて驅け出す。馬車は道路の凸凹に躍りながら、新しい護謨輪の車を滑かに廻轉させて、美しい夫人を運んで行きました。

マリエットの姿を見送つて立つて居りましたネフリユドフは、何を考へつきましたか、頭を左右に振つて、それから少時すると、足早に歩き出しました。

二四、女の客

マリエット方を辭し去つたネフリユドフは、元老院を訪ね、マスロワの控訴狀が元老院議官ウヲルフの手許へ廻つてゐる由を聞いたので、早速ウヲルフを訪問して、特別の詮議を依頼し、夕刻に伯母の家へ引返しました。

その翌日、ネフリユドフが衣服を着換へて、二階を下りて行かうとするところへ、丁度家從がモスクワから來た辯護士の名刺を持つて來ました。辯護士は自分の用件でペテルブルグへやつて來たのですが、マスロワの事件の審理が直ぐにも

始まるやうならば、其方へも出席しやうといふ考へ。

ネフリユドフは辯護士に逢つて一伍一什を物語る。辯護士はニコ〳〵笑ひながら聽いて居りましたが、

辯『ええと、それから請願書の方は何うなりました』

ネ『ええ、その事で今日これから請願局のウヲロビヨフ男爵の所へ出掛ける所です。昨日伯父の紹介を持つて出掛けたんですが、生憎面會が出來ませんでしたから』

辯『それなら私もお供しませう』

二人が出て行かうとすると、家從が奥から飛んで出て來てネフリユドフにマリエットの手紙を渡しました。

『あなたの御依頼の件に就き、良人に色々話しましたところ、好い案排に承知してくれましたから、監獄の方では早速放免してくれる事になるでせう。良人から

監獄署長に宛てて、その取計ひ方を手紙に認めて送りました。その中御用の事ばかりでなしに、きツと入らして下さい』

といふ文面、七ケ月も監獄に幽閉されてゐた者が、一言の口添えで放免されやうといふのですから、誠に可い加減なものです。

ネ『かう容易く成功すると、私は怖ろしくなりますよ。考へても御覽なさい。この分では寃罪を蒙つて獄裡に呻吟してゐる不幸な人々が幾人あるか知れません』

辯『まあ、そんな問題を深く考へたのは良くないですよ。どうせ監獄なんてものは、可い加減なものですからな。それではお供しませう』

二人は直ちに馬車を驅つて、ウヲロビヨフ男爵邸へ出掛けました。幸ひ男爵は在宅でありました。ネフリユドフの來意を聽き取つて、出來るだけ盡力しやうと言つてくれるので、ネフリユドフもそれに力を得て、男爵に別れを告げ、其足でペトロパウロスキー要塞監獄長を訪問しました。

ネ『實は少々お願がありまして上つたのですが』

長『どういふ御用件ですか』

ネ『要塞の監獄に禁錮されて居ります者で、グルケーウキッチといふのが居ります。その者の母親が息子に面會したいといふのです。面會が出來ませんければ、せめて二三册の書物の差入れを許可して戴き度いと申して居ります。その事で御願に出ました』

要塞監獄署長のクリエグスムス將軍は、目をつぶつて少時考へてゐる樣子でありましたが、その實何も考へてゐたのではありません。此人物の頭は規則で固まつてゐる。規則に違犯する事は、如何なる人から賴まれても承知が出來ないと、てんからきめてゐるのですから、ネフリユドフの言ふ事なんかは、勿論氣に留めはしない。

長『御承知だらうが、さういふ事は私の權限ではない。面會の事は皇帝陛下の定められた規則があるからね。それから書物の差入れだが、囚徒の讀んで可い書物は、圖書室に備へてある筈だ』

ネ『しかし、囚徒だつて、自分の好きな書物でも讀まなければ、自分を慰めることが出來すまい』

長『彼等は常に不平ばかり言つて居るよ』

老將軍はネフリユドフを對手にしません。斯ういふ手合に掛かつては、いくら口を酸ぱくして賴んだつて、無駄ですから、ネフリユドフも見切りをつけて、今度は女囚シユーストワの事に就て放免の命令が來てゐるか何うかを訊ねて見ました。

長『シユーストワ？そんな女囚が居つたかな。命令さへ來れば放免してやる』

ネ『何分お願ひ致します』

とは言つたものの、心の中では馬鹿々々しくつて仕樣がない。放免の命令があ

れば放免するのは知れ切つた事です。そんな事を頼むんぢやないぞ、と言つてやりたいくらゐ。

ネフリユドフは近頃にない不愉快を感じて、老將軍の家を辭しました。ペテルブルグへ來た用件の中の一つは成功したが、一つは不成功。あとに殘つてゐるのが一番大切なマスロワの控訴事件。これさへうまく行けば、遙々やつて來た甲斐はあると、ネフリユドフは辯護士に別れて、辻馬車に搖られながら、そんな事を考へ〳〵伯母の家に引返しました。

人間は妙な者で、一つの事が思ひ行りに行くと、何も彼もうまく行くやうな氣がしますが、一つ頓挫すると、何事も駄目らし思はれる。所謂悲觀といふ奴です。巖頭の感を書いて華嚴の瀧へ身を投げた藤村操君だつて、樂觀から悲觀へ突走つた結果が、ああいふ事になつたのではあるまいかと、演者は考へます。で、ネフリユドフも、非常な意氣込みでペテルブルグへ乘込みましたが、譯もなく出

來ると思つたことが、その通りに行かない。おまけに何とか將軍とか何とか男爵とか言ふ連中が、會つて見ると下らない人間ばかりなので、一日も早くペテルブルグを引揚げたくなりましたが、それも、マスロワの控訴事件には一縷の望みを屬して、その翌日、辯護士との約束を守つて、元老院へ出掛けたのであります。

マスロワ事件の審理が始まりますと、豫てネフリユドフから特別の詮議を依頼されてゐた元老院議官のウヲルフは、マスロワの控訴理由を詳細に報告して、原判決が棄却すべしと陳述し、その後に續いて、辯護士ファナーリンが、得意の辯舌を振つて、原判決の不當を鳴した。それを傍聽してゐたネフリユドフは、此分ならば控訴は確かに勝ちだと思ひました。ところが、今一人の元老院議官にスコチロドニコフといふ、名前からして譯の分らなさうな頑固老人が居りまして、極力ウヲルフに反對した。此老人はマスロワが寃罪であるか何うかといふ事よりも第一公爵や立派な辯護士が一人の淫賣婦の爲めに態々元老院へ出席して、兎や角

手數を掛けるといふのは、誠に怪しからぬ事である、と考へて居るのですから、溜りません。とう〳〵此老譯官の反對で、マスロワの控訴は不成立、棄却といふ事に相成りました。

さあ、斯うなるとネフリユドフは愈々益々悲觀せざるを得ない。元老院を出て辯護士のファナーリンと連れ立つて歩き出しましたが、ファナーリンが愉快さうに話をしかけるのが、癪に障つてなりません。そこでネフリユドフは對手の話の最中に、辻馬車屋を呼んで、さッさと伯母の家へ歸つて參りました。すると、家從が玄關へ出迎えて、

家『お歸りで御坐いますか。只今マリエット樣がお見えになつて居ります。お茶の仕度が出來て居りますから、どうぞ彼方へ』

ネ『さう、有りがたう。伯母さんとマリエットさんと、二人きりかね』

家『はい。お二人きりでございます』

他の客がゐるなら、よさうと思つたが、來客がマリエット一人たと聞いて、ネフリユドフは家從の言葉に從つて、伯母の居間へ這入つて行きました。

マリエットは、此の前見た黑づくめの衣裳ではなく、流行のはでな服を着て、美しい眼を輝かせながら、頻りとお喋りをやつて居りましたが、ネフリユドフの姿を見ると、急に眞面目な顏をして、

マ『先日は失禮いたしました。元老院の方は何んな案排でしたの。』

ネ『控訴は棄却になりました』

マ『あら、それでは女の方がお氣の毒ですわねえ。どうしたら可いんでせう』

ネ『仕方がありません……それはさうと、貴女の御盡力で、シユーストワの方は放免になりました。本人に代つて御禮を申します』

マ『御禮なんて、そんな四角張つた事をおッしやらないで。……私貴方の爲なら何んな事でも致しますわ』と仇ッぽい微笑を送る。

伯母さんのカテリーナ伯爵夫人は、マリエットの言葉や樣子を見て、甥のネフリユドフに媚びを寄せてゐると氣がついたので、それを面白がつた獨りで悦に入つて居ります。

マリエットはカテリーナ夫人をそッらのけにして、ネフリユドフの方ばかり見てゐる。

マ『ねえ、公爵、私明晩佛蘭西若居を觀に行く笑になつて居りますの。御都合が宜しかつたら、私の坐席へ入らして頂戴な』

ネ『さあ、行かれるか何うですか——』

此時、家從が這入つて來て、來客を告げました。そのお客といふのは伯爵夫人が會長をしてゐる或る慈善會の秘書役でありました。

『おや〳〵。あの人と來たら、ほんとうに話の分らない人なんだからね。マリエットさん、暫く待つてて下さい。一寸會つて直ぐ歸してやりますから。ネフリユ

ドフや、マリエットさんのお相手に、面白いお話でもしてお上げなさい』

伯爵夫人は二人を殘して部屋を出て行きました。

すると、マリエットは愁ひを帶びた美しい顏をネフリユドフの方へ向けて、心持ち體をすりよせた。

二五、戀の惡魔

マリエットはネフリユドフと二人きりになりますと、泣き出しさうな顏をして、

マ『私あなたのやうな立派な考へを持つてらッしやる方のお話を聞くと、自分の境涯が情なく思へば、ほんとうに悲しくなりますの』

局外者が聞いたらば、下らないと思ふかも知れませんが、マスロワの控訴事件が棄却となつて悲觀してゐるネフリユドフには、どういふものか此言葉が特別に深い意味を持つやうに思はれましした。で、ネフリユドフは沈默したまま、若

い美しい婦人の顏をぢッと視つめて、少時は眼を放すことが出來ませんでした。

マ『貴方は、私が何も知らずにゐると思つてらつしやるんでせう？貴方のなすッて被居しやる事や、考へて被居しやる事を……ですけれど、私よウく知つてますわ。私、貴方の御盡力なすつてゐらッしやる事に、心から感服して居りますわ』

ネ『いや、そんなに仰しやつて戴くと恐縮です』

マ『私には貴方の御心持も、その女の方の事も、よく分つて居りますわ。ええ、御尤もですとも――』

何か言はうとしたが、對手の顏に不快な色が浮んだのを認めて、マリエットは一寸口を緘んだ。此儘默り込んで了へば、當り前の女ですが、此處は交際場裡を切つて廻る才氣煥發の婦人だけに、ネフリユドフの心を牽きつけるには何ういふ風に持ちかければ可いかといふ骨法を呑み込んで居ります。

マ『それに私も監獄へ參りまして、あの苦んでる人達や、その恐ろしい有樣を見ましてから、貴方のお考へがよく分りました』

可い加減の嘘八百を並べた。芝居やオペラへは毎晩のやうに行くかも知れませんが、監獄の視察なんかは、てんで一度だつてやつたことはない。けれども嘘も方便、之を用ひないと男の心を捉える事が出來ないと考へました。案の定、根がウブのネフリユドフは、御機嫌が直つたやうです。マリエットは其機を逸せずに話を進める。

マ『貴方は苦んでゐる人達を、皆な助けてやらうと思つてらつしやるのね。役人達の無慈悲の爲めに恐ろしい苦みに逢つてる人達を救はうと思つてらしやるのね。そのお心が、私にはよく解りました。私のやうなものでも、さういふ立派なお仕事の少しでもタシになりますことなら、自分の身を犧牲にしても可いと存じますでも、ネフリユドフさん、人は誰でも、それ〴〵運命が定つてゐて、思ふやうにはなりませんのね』

かう言つてマリエットは、ちよッと眼を落して、溜息をついた。此婦人はなか〳〵手管が上手です。ネフリユドフは美事に對手の罠に掛つちまつた。

ネ『では、貴女は御自分の運命を不滿足に思つてゐらつしやるんですか』

マ『私？仕方がないから滿足したやうなふりをしてゐますけれど、これで心の中は——』

ネ『さうですか。實は私も自分の境遇をつく〴〵不滿足に感じて、これから新しく運命を開拓しやうと思つてゐるのです』

マ『公爵の御身分で、さうした決心を遊ばすのは、非常な勇氣を持つてらしやる證據ですわ。私、お世辭ではありません。ほんとうに感服いたして居りますのよ』

ネ『私も貴女から、さう言つて戴くと、嬉しいです。私はペテルブルグへ來てから、癪に障る事ばかりあつて、不愉快でならないところへ、貴女のやうな同情者を得たのは、實に嬉しい』

マ『ほんとうに、立派な地位にある人でも、ずゐぶん物の分らない人がありますわね。良人なぞも、少しも私の心持を理解してくれませんのよ……』

あとは口で言はずに、無線電信をかけた。

『私、良人には愛想がつきましたわ。貴方のやうな立派なお心の方と一緒に暮したら、どんなに嬉しでせう。スグヘン』といふ無線電信です。これがマリエットさんの眼から、ネフリユドフの頭へ傳はると、ネフリユドフの魂は、ふら〳〵と動き出した。一種のエレキ作用ですな。

ネ『御同情します』

マ『ありがたう……』

ネ『マリエットさん。僕は、昔の無邪氣な子供時代に復りたい！』

マ『あたしも、あの時代に復りたいわ』

ネ『もう何年になりますかねえ』

マ『一むかしですわ……』

ネ『おや、貴女は何を泣いてるんです』

マリエットが香水の好い匂のする赤いハンケチを出して、眼を拭き始めたので

ネフリユドフは、女に身を摺り寄せました。

ネ『え？マリエットさん。どうしたんです』

マ『……』

ネ『……』

西洋講談は調法なもので、ポツ〳〵と、點を打つて置けば、二人の微妙なる心理作用がちやんと讀者にお分りになる。古い奴ですが、遠くて近きは男女の緣、

マリエットとネフリユドフは、いつの間にか手を握りあつて、ぴッたりと寄り添つてしまつた。少時すると、若い美しい夫人は、顏を擧げまして、

マ『ね、今度は何時またお目に懸れるでせう？』

ネ『いつでも、逢へます』

マ『だつて……』

ネ『だつて、なんです。……マリエットさん』

マ『ネフリユドフさん……』

此時のネフリユドフさんの頭の中には、監獄も裁判もカチユーシヤもありません。これだから、男女のエレキ作用といふ奴は不思議です。

マ『ね、明日きツと入らして下さいな』

ネ『行きます。しかし、御主人も御一緒でせう？』

マ『ええ、一緒だつて可いぢやないの。良人はぼんやりだから、邪魔にはならないことよ』

いつの間にか御亭主を邪魔物扱ひにしてゐる。ひどい奥さんです。『邪魔にはならないことよ』と言つて置いて、なまめかしい笑顏をチラリと見せました。ネフ

リユドフさんも、此時ぐらゐ體がぞく〳〵したことはなかつたさうです。

此分で發展して行きましたら、どんな事に相成りませうか。幸にして——いや御本人同士には『不幸にして』かも知れませんが——伯母さんのカテリーナ伯爵夫人が部屋へ戻つてゐらしたので、二人は慌てて離れました。なんだ、つまらないなどとおツしやるな。かやうな濡れ場ばかり説明してゐたんでは、それ『復活』の本旨にそむきます。如何に興味本位の西洋講談なりと雖も、原作者の本旨を等閑にすることは、まかり成らん。

さて白髪のお婆さんが戻つて來たので、情緒纏綿たる光景は忽ち停電と相成つた。

マ「あら、停電。あたし仕方がないから、歩いて歸るわ」

まさか、そんな事は言ひますまいが、マリエットは、殘り惜しげに、ネフリユドフと握手を換して歸へつて行きました。

その晩、ネフリユドフは獨り部屋へ引込んで、蠟燭の灯を吹消して寢床へ横しなましたが、どうしても眠られません。ともすればマリエットの艶な笑顔が目の前にチラついて來る。『今度は何時又たお目に懸れるでせう』と溜息をついて、ちらりと秋波を送つたマリエットの顔が、暗闇の中にあり〳〵と浮んで來る。

『自分がカチユーシャと一緒に西比利亞へ行くのは、實際正しい事だらうか。自分の財産を捨てて了うなんて、それも正しい事だらうか』

ネフリユドフは自分に向つて斯樣な質問を起しましたが、それに答へることも出來ず。懊惱煩悶してゐる中に、いつしかペテルブルグの夜は明けかかつて、戸の隙間から朝の光が射し込んで來ました。眞面目な考へや、浮いた考へが、ごッちやになつて、ネフリユドフの心は愈々益々亂れるばかり。

『自分の今まで企てて來た色々の事は、みんな空想ではなかつたか。空想でないにしても、それを後悔するやうな事になつたら、何うしよう』

かうも考へて、ネフリユドフは曾つて經驗した事のない惱ましさと絶望とに襲はれました。さうして此自問に答へる氣力もなく、以前軍隊生活をしてゐた時分トランプに敗けてぐッすり寢込んだ時のやうに、重苦しい眠りに落ちました。

二六、女囚人の家

翌朝眼が覺めると、ネフリユドフは前の日に何か罪を犯したやうに感じました しかし考へて見ると、何の惡い事もしない。何の罪も犯しはしない。が、惡い考へを起したことは確かである。マリエットの美しい笑顏に心を動かして、カチユシャの事を忘れて了つた。それから寢床へ入つて、マリエットの顏が目の前にチラついた。カチユシャと結婚して、シベリヤへ行くといふ決心が、確かにぐらつた。それが空想であつたやうにも思はれた。再び元の生活に復つて、マリエットとの戀を樂まうかといふ氣にもなつた。それを朝になつて想ひ出すと、ネフリド

フは自分ながら何うして其樣な氣になつたらうかと、呆れてしまひました。やり遂げなければならないと決心した事柄は、たとへ今迄にない困難なものであるにしても、今の自分に取つては、それが生涯の唯一つの道である。自分は何うしても、此道を進まなければならない。

ネフリユドフは決心を固めて寢床から跳ね起きました。

其處で、ペテルブルグに逗留するのも愈々今日限りと言ふので、彼は要塞監獄から救ひ出したシユーストワに會ふ爲めに、食事をそこ〳〵に濟ませて、ワシリエフスキー街五丁目へ辻馬車を驅りました。シユーストワから手紙が來て居りますから、その所番地が分つてゐるのです。

シユーストワの住んでゐる共同貸家へ着きますと、ネフリユドフは裏側の階段から案内されて、食物の臭ひのむん〳〵する生温い臺所へ這入つて行きました。

『何の御用ですか』

前垂がけの年寄りの女が、眼鏡越しにネフリユドフを眺めながら訊ねる。

ネ『私はネフリユドフといふ者です』

婆『まあ、公爵さまで御座いましたか！どうして裏梯子からなんぞお出でになりました。勿體ない、此度は色々御恩になりまして、お禮の申しやうも御坐いません。私は彼女の母親で御坐います。御蔭樣で娘も命拾ひを致しました。さあ、どうぞ、此方へお越しを願ひます』

ネフリユドフはお婆さんに案内されて、奥の一間へ通りました。

婆『娘や、公爵さまがお見えになつたよ。お前を助けて下すつた……』

ネ『ヅーホワが私に助けてくれるやうにと言つた危險な婦人といふのは、あなたですか？』

蒼白い顔をして、無邪氣さうな娘でよ。おそる〳〵自分の顔を見守つて居りますので、ネフリユドフは笑ひながら、言葉をかけました。

シ『はい、私』

ネ『あなたが監獄へ入れられたのを、ヅーホワが大層悲しんで居りました』

シ『ヅーホワさんは、家の叔母さんのお友達ですけれど、私よく知らないんです』

其處へ這入つて來た一人の中年婦人。白い仕事着に革帶を締め、非常に快活らしい顔付をしてゐる。これはシューストワの叔母に當るコルニロワといふ婦人で政治運動をやつてゐる、日本のお役人に言はせると、一種の危險人物。

コ『ヅーホワは何うしてゐます？　逢ひになりましたか、辛抱して居りますか』

ネ『不平どころか、大元氣だと言つて居りました』

コ『さうでせうね。あの人なら監獄なんか何とも思つてはゐますまい。立派な人格の女です。あの人は、いつも他の事を心配して、自分の事は少しも關ひません』

ネ『さうです。私が面會した時も、シューストワさんの事ばかり氣にしてゐました。何の罪もない若い娘さんが、監獄でひどい目に逢つてゐるのを頻りと心配し

て居ました」

コ『ええ、さうでせう。此娘は何の罪もないのに、私のお蔭で苦しい思ひをしたのです』

シ『あら、叔母さん。そんな事はありませんわ。私も關係したんですもの』

コ『まあ、私の言ふ事をお聞きよ。公爵、斯うなんです。事の起りは、私が或人から祕密書類を預かつてくれと頼まれましたのが、始まりなんです。私には家がないもんですから、その書類を此家へ持つて來て預けました。すると、其晩、警官に踏込まれて、家宅捜索を受けまして、書類は押收され、此娘が拘引されました』

母『もう、其樣な話はお止めよ』

コ『可いぢやありませんか、折角公爵が入らして下さつたから、お話をするんですよ……それから、役人が色々に嚇したりすかしたりして、此娘に白狀させやうとしましたが、此娘は何うしても白狀しませんでした。自分の姪を褒めるんぢやありませんが……』

シ『ええ、私白狀しなかつたわ』

十六七の娘でも、なか〳〵根性がしッかりしてゐると見えます。小娘からしてかういふ案排しきですから、露西亞といふ國には、ちよい〳〵とえらい騷ぎが持上るのです。

コルニロワは卷煙草に火をつけて、又た話しを續ける。

コ『若い娘が一人ぽッちで檻房へ入れられてゐるのはそれは恐ろしいものなんです』

ネ『若い女ばかりぢやない。誰だつて恐ろしいでせう』

コ『い、え、さうではありません。本當の革命黨なんかは、牢屋へ入れられると氣が落着いて却つて安心が出來るさうです。警察から始終目をつけられて、氣苦勞の絶えないものが、牢屋へ入れられれば、責任が輕くなりますからね。ですけ

れども、若い者や罪のない者は、さうに行きません。その最初の驚きは、ほんとうに恐ろしいものです。食物が悪いとか、空氣が悪いとか、そんな事は何でもありません。が、道德上の苦みに責められるのです』

『すると、貴女も經驗があるんですか』

『私ですか、私は二度監獄へ這入りました。始めて捕縛された時には、何にも罪を犯した覺えはありませんでした。丁度二十二の時で、小供が一人ある上に、姙娠して居たんです。その時、身の自由を失つたり、子供や良人に別れたりすることは、それは辛う御坐いましたが、それよりも、今日からはもう人間ではなくて、品物同樣にされてしまうのだと思ふと、それが何よりも辛う御坐いました。監獄へ着くと、獸のやうな獄吏達が、私の着物を脫がして、番號のついた獄衣を着せ、圓天井の檻房へ連れて行つて、扉を開けて私を押し込め、ぴッたりと扉を閉めて錠をおろして了ひました。戸の外には戰砲を持つた番兵が往つたり

來たりして、時々戸の隙間から中を覗き込みます──私は恐ろしくつて氣を落してしまひました。それから一番腹の立つたのは、私を取調べた憲兵が、私に卷煙草を一本やらうと言つた時でした。人が煙草が好きと知つてるくらゐなら、人が自由を願ひ、光明を愛し、母が子供を愛し、子供が母を愛してゐる事を、知らない筈はありません。それだのに、殘酷にも良人や子供から私を引裂いて、獸か何そのやうに檻へ投り込むことが何うして出來るんでせう？そんな殘酷な目に逢うと、人間はみんな惡人にならずにはゐられません。神を信じ人を信じて、人間はお互に愛しあふものと信じてゐた人が、そんな目に逢はされると、もう神も人も信じることが出來なくなります。私も、その時から人の道を信じなくなつて、片意地な人間になつてしまいました』と言葉を切つた、コルニロワは淋しい微笑を洩した。

皆さん、此コルニロワの言葉を何とお聞きになりますか。聖代の日本は別とし

て、世界の各地の監獄では、日々に幾千幾萬といふ無罪な人々が、斯うした野獣のやうな取扱の下に、人間としての溫味を失ひつゝありのです。なるほど社會といふものがある以上は、監獄も必要でせう。しかし、必要だからと言つて、其處に如何なる現象が起りつつあるかを考へても見ずに、平氣でゐるといふことは、甚だ宜しくない。便所は家に必要だと言つて、糞尿が溢れ出すのを放置つて置くのと同じ事、便所の掃除をするなら、監獄制度の改良もして貰ひ度い。苟も清潔屋に毎月何錢かを支拂うことを知つて居られる方は、監獄の改良といふことにも注意を拂ふべきである……。

『何の爲めにこんな女の子の一生涯を破滅させなければならんでせう』とコルニロワは、ネフリユドフに向つて議論を吹掛けるやうに言ひましたが、急に悲しけな調子になつて、

コ『それも此私が原因だと思ひますと、傷ましくつてなりません。ほんとうに

あなたのお蔭で、姪は命拾ひを致しました。あなたといふものがなかつたら、此娘はきッと死んでしまひましたでせう。ありがたう御坐いました。此御恩は決して〳〵忘れは致しません』

ネ『その御禮には及びません。シューストワさんを助ける事が出來て、私は此樣な嬉しいことはありません』

マリエット夫人の寶石を飾つた手を握つて、目尻を下けてゐた時とは、大分心持ちが違つて居ります。一時は吾が親愛なるネフリユドフ公爵、どうやら根性がぐらついて、むかしの野良息子に逆轉しさうでありましたが、この樣子では、演者も先づ安心。『マリエットの奥さんと約束があるなら、今晩行きたまへ』と言つてやりたくなる。折角ペテルブルグ迄出て來たんだ。芝居の一度ぐらゐは宜しからう……。

二七、芝居見物

監獄と裁判のお話ばかりでは、お退屈だらうと考へますから、本回はネフリユドフさんのお芝居見物といふ事に致します。何事にも變化が必要。トルストイ先生の『復活』を看板にしたつて、監獄の視察報告のやうなものでは、西洋講談のお客樣が御承知なさるまいと、これで演者もなか〳〵苦勞をして居ります。何卒此點を御賢察下され度い。

それから今一言申し上げておきますが、松井須磨子さんのカチユーシャのお芝居は『復活』の中の面白いところばかり拔いて、仕組んだものです。然るに、演者の講談は『戀のカチユーシャ』と題しましても、芝居の筋書では御座いません。少くとも大傑作『復活』の全般を御紹介いたすと同時に、原作者の精神をも傳へたいといふ考へ、此點をも御承知下され度い。

さて、ネフリユドフに於きましては、その晩ペテルブルグを出發するつもりでありましたが、マリエットと約束をして了つたから、いやでも應でも、芝居へ行かなければなりません。尤も、こんな約束は反古にしたつて差支ないやうものの如何なる約束にせよ、破るといふのは善くない。かう考へて、ネフリユドフは出掛けることにしました。其處にはそれ、マリエットの顏を見たいと言ふ心が、約九パーセント程含まれてゐる。

燕尾服にオペラハット。りゆうとしたハイカラ姿で、劇場へ參りますと、丁度『椿姫』の二幕目。佛蘭西の何とかいふ女優が、肺病やみの臨終の所をやつて居る。劇場は一ぱいの大入り、外廊下に立つてゐた制服の家從が、丁寧にお辭儀をして坐席の扉を開けてくれましたので、ネフリユドフは中へ這入つた。

向う側の坐席に立つてゐる者、腰を下してゐる者、近くの坐席にゐる者、平場にゐる者——若い女同士、夫婦づれ、胡麻鹽頭、禿げ頭、毛の縮れたの——觀客

は一様に夢中になつて舞臺を眺めて居る。

マリエットの坐席には、他にネフリユドフの知らない貴婦人が一人と、男が二人居りました。その一人は、鼻の高い、生眞面目な、底意の知れない表情をした威風堂々たる制服姿の將軍。これがマリエットの良人らしい。『ぼんやりだから邪魔にはならない』とマリエットは言つたが、どうして油斷も隙もないおツかない小父さんだと、ネフリユドフは心の中で考へてゐる。

此晩のマリエット夫人の扮裝はと見てあれば、最新流行型のローブ、デコルテイ。頸の廻りに黑の點々がついてゐて、その爲めにあらはに出てゐる恰好のよい撫で肩が際立つて白く見える。全くふるひ付き度いくらゐ。ネフリユドフが入つて行くと、マリエットは、直ぐ振り向いて、嬉しさうな微笑を送り、手に持つて扇で、自分の後の椅子へ指し招きました。

マリエットの良人は、いやに落ちつき拂つて、ネフリユドフを眺めて目禮し、

それからマリエットと目を見換しましたが、その容子には、自分が此美しい婦人の持主だぞと、見せつけるやうな風があり〳〵と讀まれました。どうも此の己が女房を褒めるぢやないがと言つたやうな表情は、甚だ癪に障る。女房の自慢をするなら、人のゐない所で勝手に自慢しろ。町内で知らぬは亭主ばかりなりツてのは、手前の事だらうと言つてやりたくなります。『成るほどぼんやりかな、手前の女房は昨日俺の手を握りやがつて「ね、今度は何時まにお目に懸れるでせうねえ」と來やがつたぞ、やい唐變木』ネフリユドフも少なからず癪に障つて、對手の將軍を睨みつけましたが、マリエットが其處を察して、仇ッぽい秋波をお贈り下されたので、此場は無事に濟んだ。

女優の獨白がお終ひになると、滿場急霰の如き拍手喝采。それを切ッかけに、マリエットは衣摺れの音をさら〳〵させて、スカートを揭げながら、坐席の後ろへ行つて、ネフリユドフを良人に紹介する。

マ『あなた、こちらは昔のお友達のネフリユドフ公爵でいらしやいます。ネフリユドフ公爵、良人で御坐います』

何が良人で御坐いますだい。昨日はぼんやりなんて言つたくせに。

ネ『お初にお目に懸ります。私はネフリユドフと申す弱輩者、何分よろしく——』

挨拶はしたものゝ、吾ながら馬鹿々々しくなつて、ネフリユドフはマリエットに向ひ、

ネ『お約束しなかつたら、今日モスクワの方へ歸るところでした』

マ『私なんぞにお逢ひにならうと思つて下さらなくつても、あの素晴らしい女優だけは見てゐらつしやらなければなりませんわね』

此方が約束だから仕方なしに來たと仄めかせば、先方は、女優だけは見て行けといふ。やい、昨日おのれに何と言つた。いやさ、何とぬかした。しな〳〵と體を摺り寄せて、赤いハンケチは、ありや何だ。わりやア男一匹騙しをッたな。今

更そんな文句を並べたつて、始まりません。

ネ『あんな技巧は私には何の感動もありません。私は今日眞實に苦んでゐる人達を見て來たのです。私は、貴方がたの御盡力で放免になつたあの女に逢つて來たのです』

マ『此方は、私があなたにお願ひしたあの女の事を言つてらしやるんですよ』

マリエットは冷笑的な調子で良人に說明をする。

將軍『ああ、さうか。放免になつたのは結構なことぢや。どれ、煙草を吸ひに行つて來やう』

マリエットの良人は悠然と席を立つて、廊下の方へ出て行つた。

昨日マリエットは、話があると言つたが、一體どんな話だらう。今にも言ひ出すか、乙に絡んで來たら、手嚴しく刎ねつけてやらうと、ネフリユドフは待ち構へて居りましたが、マリエットは何にも言ひ出しません。

ネ『奥さん、何か私にお話がおありのやうでしたが……』

マ『あら、そんなに改まつて、此處は劇場ぢやア御坐いませんか。あなたの演劇論でも伺ひませうよ』

ネ『私は貴女と演劇を論じてゐるほど、心の餘裕はありません』

マ『まあ、今晩は何うなすッたの？やかましい事ばかりおッしやつて、ほ、、、ほ』

ああ分つた。此女が自分を誘つたのは、何も用談があるからではなく、そのふッくりした撫肩を露はした新流行のローブ、デコルテーを見せつけやうといふのだな。へんそんなものなら日本の三越にだつてあるぞ。『今日は帝劇、明日は三越』てえのは此處の理屈を言つたものだ。人を馬鹿にするない……しかし、綺麗な女だなア！

綺麗な女だが、何といふ僞言者だ。自分を戀に落さうとしたのも、みんな口か

ら出ませの僞りであつた。外面如菩薩、內心如夜叉、南無阿彌陀佛、まさか、そんな事は言ひません。ネフリユドフは何とも知れず厭な氣持ちがして、外へ出やうとして、幾度か立ちかけましたが、思ひ切つて歸れもせず、又た腰をおろして、ぐづ〳〵して居りました。

しかし、マリエットの良人が、野蠻人のやうな口髭へ葉卷の匂ひをぷん〳〵させながら歸つて來て、ネフリユドフなんかは、氣にも留めないと言つたやうな、軍人一流の尊大ぶつた樣子をして席に就いた時、ネフリユドフは到頭起ち上つて開いた扉のまだ閉まるか閉まらないうちに、劇場を飛び出してしまひました。

それから伯母の家へ歸る途中、背のすらりとした、けば〳〵しい身裝の女が、アスファルトの歩道に沿つて、すぐ眼の前を歩いて行くのを見て、ネフリユドフは氣に留めずにはゐられませんでした。その女の顏や姿には、厭らしい淫らな表情が溢れて居りました。通り掛りの人は誰でも振りかへつて、ぢろ〳〵と其女を

眺めて行きます。ネフリユドフも足早に女を追ひ越して、折りかへつて其顔を眺めました。すると、女は厚化粧の顔に微笑を含んで、ネフリユドフに秋波を送つた。それを見て、ネフリユドフは、不圖マリエットを想ひ出したのであります。

「あの女が笑つたのも、マリエットが劇場で自分を見て笑つたのも、その意味は同じ事なんだ。いや、あの女の方は生活の必要に廻られてやつてゐるのだが、マリエットの方は、情慾を弄んでゐるのだ。街に彷徨つてゐるあの女は、渴きの烈しい人に飲ませる腐れ水だが　劇場にゐたあの女の方は、知らず識らず近寄つて行く者を、誰れかれの區別なく、毒殺する劇藥のやうなものだ」

こんな事を考へ〳〵歩いてゐると、ネフリユドフは、以前人妻と醜關係を結んだ時の事を想ひ出して、慚愧の情に堪えられなくなりました。

人間の持つてゐる肉慾の獸性は嫌惡すべきものではありますが、その獸性が赤裸々な姿で存在してゐる間は、吾々は高い精神生活の上からそれを觀察して、それを嫌惡して居りますから、吾々は墮落したとしないとを問はず、生れたままの人間であります。しかしながら、其獸性が詩的感情とか、美的感情とかいふ假裝の下に隱れて、吾々の崇拜を求めるやうになつた時、その時には吾々は最早全く獸性に呑まれてしまつて、善と惡とを區別する力もなく、獸性を崇拜することになる。

ネフリユドフは、眼の前の宮殿や要塞やネヴ河や株式取引所を見たと同じやうに、はッきりと此眞理を認めた。さうしてペテルブルグの夏の夜には眞の暗黑がないと同じやうに、ネフリユドフの心の中も、最早無智の闇ではなかつた。今や彼の心には、何處からともなく、神祕的な光が射し込んだ來た。それが不自然な朦朧としたものであるとしても、彼は其光を見ずにはゐられなかつた。

芝居見物と標題を置いて、トルストイの哲學を演述するのは、これ即ち狗頭を揚げて羊肉を賣るものでありまして、西洋講談の貴重なる所以は、玆に存するの

であります……えい。くどい男だ……

二八、精神の最高潮

ネフリユドフは途中何事もなく、モスクワへ歸つて參りました。マスロワは何うしたらう、控訴の結果が何うなつても關はないと言つてゐたが、控訴棄却の話を聞かせたら、やつぱり落膽するに違ひない。さらばと言つて、此話をせずにはゐられない。兎に角、マスロワに逢はう、かう考へまして、ネフリユドフは、停車場から眞直に監獄病院へ出かけました。

アメリカの思想家トーローの言葉に、「何事をも束縛する政府の下にあつては、正しい人間の眞の住所も亦た監獄である」と言ふのでありますが、ネフリユドフは、監獄病院へ馬車を驅る途中、つくづく此言葉を眞理だと思ひました。

病院の戸口番の老爺は、ネフリユドフの顏を見覺えて居りまして、

番『公爵、マスロワはもう此處には居りません』

ネ『何處へ行つたんです』

番『また監獄へ歸りました』

ネ『どうして？』

番『公爵の前ですか、ああ言ふ人間は仕方がありませんね。助手の醫員と變な事をやつたものですから、院長さんに追ひ歸されたんですよ』

ネフリユドフは之を聞いて、驚きもし、嫌な心持ちもした。自分が斯う迄肩を入れてゐるのに、病院へ來て早々、そんな事を仕出かすとは、呆れた人間であるなるほど一旦墮落した女は手のつけやうがない。自分はマスロワの心が變つて來たのを喜んでゐたが、やッぱりさうであつたか。マスロワが自分の言ふ事に快く應じなかつたのは、その爲めであつたか。さあ、これから何うしたものであらうこんな事になつても、自分は彼女に結び付いてゐなければならないのか。こんな

事が出來た以上は、もう自分とマスロワの關係は絶えたも同然ではないか。

ネフリユドフは餘ッ程マスロワを斷念しやうかと考へました。しかし、彼の良心は直ぐと此考へを否認しました。いや、何が起らうと自分は決心を變へることは出來ない。マスロワには、マスロワの心の儘にさせて置けば可いのだ。助手に關係しやうと、何うしやうと、それはマスロワ一人の知つた事だ。自分は何處までも一身を犧牲にして自分の過去の罪を贖はなければならない。たとへ形式的にもせよ。マスロワと結婚し、何處までもマスロワに從いて行かう。

こんな事を考へながら、ネフリユドフは、いつのまにか監獄の大きな門をくぐつて、門衛室の前に立止りました。

ネ『女囚のマスロワに面會したんです』

看守『あ、公爵でゐらッしやいますか。近頃は非常に嚴重になりまして、ちよッとお取次致すのも困るんで御坐います。元の典獄さんが免職になりましてね。あ

んまり規律が亂れたからとかで。今度の典獄さんは、非常に嚴格なお方で御坐います。彼處に典獄さんが居りますから、何なら直接にお訊ねなすッたら宜しう御坐いませう』

ネフリユドフは典獄に面會して、用件を話しました。ところが此典獄はネフリユドフに目もくれずに、

典『面會は指定の日に面會室で許すことになつてます』

ネ『しかし、私は皇帝陛下へ捧呈する上奏文の署名を求めに參つたのです』

典『ではその請願書を私にお渡しなさい』

ネ『いや、是非とも直接本人に面會したいのです。私は知事から特典を得てゐます』

典『ああ、さうですか。それでは事務所へ御出で下さい』

ネ『ついでに國事犯のヅーホワといふ女に面會したいんですが』

典『國事犯人との面會は絶對に禁じられて居ります』

事務室へ這入つて、少時待つて居りますと、マスロワが看守に連れられてやつて參りました。

典『それでは用件をお話しなさい』

ネフリユドフはマスロワの傍へ歩み寄りましたが、今日は何うしても握手する氣になれません。

ネ『惡い知らせを持つて來たよ。元老院へ出した控訴は棄却になつたんだ』

ネ『私はきッとさうだらうと思つてゐました』

ネフリユドフは何とも言はずに、女の顏を凝視めて居る。女の眼に涙が一杯溜つて居るのを見ても、ネフリユドフの心は和ぎません。

典獄は立ち上つて室内を往つたり來たりし始めました。

門衛から噂を聞いて、忌はしくは思つて居りましても、ネフリユドフはマスロ

ワを慰めてやるのが當然だと考へ直しました。

ネ『お前氣を落しては可けないよ。陛下へ上奏すれば首尾よく行くかも知れないからね。どうか好い具合に行けば可いが——』

マ『上奏なんて、そんな事、私考へてはゐませんわ』

ネ『それぢやあ、どうしようと思ふんだ』

マスロワは涙ぐんだ眼で少時對手を視つめて居りましたが、やう〳〵に、

マ『あなた病院へ入らしたでせう？私の話をお聞きになつて？』

ネ『それが何うしたと言ふんだ。そんな事はお前一人の知つた事だ』

自分のやうな、立派な家柄の娘とでも結婚出來る男が、自分から進んでマスロワのやうな女に結婚を申込んでゐる。それを、人の氣も知らないで、病院の助手なんかに關係するといふのは、何といふ腐れ果てた女だ。マスロワが病院の事を口にすると、ネフリユドフは又た斯う考へて、忌々しくなつて來ました。

ネ『ちやア此請願書に名前をお書き』

ネフリユドフはポケットから大きな封筒を取出して、テーブルの上へ願書を展げました。マスロワは、頭布の端でそッと涙を拭いて、

マ『何處へ書くんですの？』

ネ『其の下の方だ。訊かなくつても分つてるだらう』

マスロワは男の冷淡な語調を聞くと、胸に迫つて來る悲しみに慴をわな〳〵顫はせながら、テーブルに向つて腰掛けました。ネフリユドフは其のしよんぼりした後姿を視守つて、默つて立つて居りましたが、その胸の中には、自分の矜りを傷けられた怒りと、女を傷ましく思ふ憫みとが、少時入り亂れて居りました。

ネ『マスロワ、私は、お前が何んな事をしようとも、自分の決心は變へないつもりだ』

典獄が廊下へ出て行つたので、ネフリユドフはそれを好い折と思つて切り出した。マスロワはペンを摑いて、悲しげにネフリユドフを見上げました。

マ『あなたは、私を疑つてゐらつしやるのね。どうせ墮落した女ですから、何と思はれても、仕方がありませんわ。でも、貴方のお世話になつてゐて……』

ネ『分つてる。何も言つてくれるな』

斯う言はれますと、マスロワは悲しさを堪えることが出來なくなつて、わッと泣き出しました。涙は女の武器とか申しまして、大抵な男は、女に泣かれると、ぐにや〳〵となつて了う。マスロワの浮氣を怒つてゐたネフリユドフも、いつの間にか怒りを忘れて、女に同情する心になりました。

ネ『泣かないでも可い。私が附いてる』

マ『いゝえ、其事ではありません。私貴方のお世話になつてゐて、まさかあんな事……浮いた噂を立てられたのが、くやしう御坐います。それを貴方までが眞實にしてゐらッしやるかと思ふと、私もう世の中が厭になつてしまひました』

ネ『それでは、何うしてお前は此處へ追ひ歸されたんだ』

マ『あの病院に若い助手が居りました。その男は、私が病院へ參りました日から私にうるさく附き纏ひました』

ネ『うむ』

マ『或日、私が藥局へ藥を取りに行きますと、其男が、いきなり私に抱きつくんで御坐います。振り切つて逃げやうとしましたら、そのはづみに、其男がよろよろとして、藥棚の罎に觸りましたもんで、罎が二本落ちて、こわれてしまひました。その音を聞きつけて、院長さんがやつて來ました』

ネ『うむ、それから何うした』

マ『すると、其助手が、院長さんに、さん〳〵私の惡口を言ふんです。『此女が私に淫らな眞似をしますから、私は振り切つて逃げやうとしたんです』なんて、自分のした事をあべこべに私がしたやうに言ひくるめて、私の事をさん〳〵惡く言

ひました』

ネ『ほんとうか？』

マ『なんで嘘を申しませう。わたくし悔しくッて悔しくッて……』

ネ『よし、よし。それでお前は病院から出されたといふんだね。さうか分つた』

ネフリユドフは女の言葉を全然信用する氣にはなれなかつたが、一概に看守から聞いた噂を信じて、マスロワを忌々しく思つたことを惡いて考へました。

ネ『さういふ事なら、尚更、私はお前に同情しなければならない。私は何處までも言ひ出した通りにする。お前が何處へやられても、私はきッと一緒に行くよ』

マスロワは泣顏に喜びの色を浮べたが、急いで男の言葉を遮つた。

マ『何の爲めに一緒にゐらッしやるの……』

ネ『だから、途中でお前の入用なものを考へて置くが可い』

マ『ありがたう、別段入用なものもないやうですわ』

典獄が室内へ戻つて來たので、ネフリユドフはそこ〳〵に別れを告げて、監獄を出ました。さうして彼の心には、曾つて知らなかつたやうな深い喜びと愛情が湧いて來ました。マスロワの辯解が眞實ならば勿論であるが、たとへそれが虚僞であるとしても、そんな事で自分の女に對する愛を變へてはならない。自分は何處までも女を保護してやらなければならない。それが自分の任務である。かう決心すると、ネフリユドフは喜悅の念に充されて、今までにない精神の高潮に達したのであります。

一方マスロワは、助手の一件を充分に辯解することが出來ないで、心殘りでありました。信用して下さらなければ、下さらないでも可い。と一旦は思つても、又た考へ直すと、悔しくつて仕樣がありません。

マスロワは飽くまでもネフリユドフとの結婚を拒絶するやうでありますが、その實、彼女の胸の中には、ネフリユドフに對する愛の火が再び燃え始めたのであ

ります。彼女は酒もやめ、煙草もやめ、じやら〳〵することもやめ、病院へ行くのがネフリユドフの氣に入るのだと察して、病院へも移りました。このやうにネフリユドフの言ふことを聽いたのは、ネフリユドフを愛してゐるからであります。マスロワはネフリユドフとの結婚を拒絶して居る。しかし、これは言ひ出した言葉を通さうといふ意地づくばかりではない。自分のやうな者と結婚しては、ネフリユドフに取つて不幸であると考へ、此上ネフリユドフに犧牲を拂はせてはならぬと覺悟したのであります。それほどまでに思つてゐるのに、病院の噂を眞に受けられて、賣女であつた時と同樣に思はれては、マスロワとしては成程殘念に違ひない。

しかし、マスロワは充分に自分を辯解することが出來ずに、ネフリユドフとはいない別れを告げたのであります。

二九、姉と弟

控訴が棄却されましたので、マスロワは囚人の一隊に加はつて、七月の五日にいよ〳〵シベリヤへ護送されることとなり、ネフリユドフも、其日に一緒に出發する爲めに支度を調へました。

その前日、ネフリユドフの姉、ナタリヤが、良人と連れ立つて、態々田舍から逢ひに來た。市内の或る上等ホテルへ宿を取つて、ナタリヤは直ぐネフリユドフの家、即ち亡母の舊宅へ訪れたところ、今では家を出て他へ下宿してゐるといふので、老女のアグラから所番地を聞いて、直ぐ其下宿へ馬車を驅りましたが、生憎留守でありました。そこでナタリヤは弟の部屋へ通り、机に向つて置手紙を書いて、ホテルへ引返しました。

ネフリユドフは其晩遲く歸つて來て、姉の手紙を讀むと、取るものも取り敢え

ず、姉の所へ會ひに行きました。部屋には丁度ナタリヤ一人ゐて、良人は次の部屋に休んで居りました。

ナタリヤは飛上るやうに席を立つて、弟を迎へました。二人は母親が死んだ時以來、まるで會はずにゐたのですから、あまりの懷しさに少時は顏を見合せて居りました。

ネ『姉さんは大變肥りましたよ。昔よりも若くなりましたね』

ネフリユドフは漸く口を開いた。ナタリヤは弟の顏をつく〴〵と見て、

ナ『さうして、あなたは大層おやつれだね』

ネ『さうですか、時に義兄さんは？』

ナ『隣の部屋で休んでゐますよ。昨夜汽車の中でちッとも眠られなかつたもんで』

ネ『下宿へゐらして、さぞ吃驚なすッたでせう。家は廣すぎますし、それに不愉快でなりませんから、彼方へ引越したんです。僕は家なんか要りませんよ。姉さ

んにそッくりお讓りします」

ナ『その話はアグラから聞きました。讓つてくれるのは有りがたいけれど、でも……』

ホテルのボーイが茶を持つて來たので、ナタリヤは口を噤んだが、少時すると屹とるずまいを正しまして、

ナ『時に、ドミトリ、私は何もかも知つてゐますよ』

姉の言葉にネフリユドフも居ずまひを正しました。

ネ『何です。僕の事ですか？それは姉さんが知つてゐて下さるのは仕合せです』

ナ『でも、あんな境涯に沈んだ女を、うまく矯め直す望みがあるの？』

ネ『矯め直すのは女の方ではなく、僕の方です』

ナ『そんなら、何も結婚しないだつて、方法は幾らもあるでせう？』

ネ『僕は結婚するのが一番好いと思ひます』

ナ『でも、そんな事をして、あなたが幸福になれますか』

ネ『自分の幸福といふ事が中心ではありません。人の生涯といふものは——』

ナ『人の生涯がどうなの？』

ネ『人の生涯といふものは、幸福よりかもッと他の或物が必要です』

ナ『あなたの云ふ事は、私には分りません』

此時、次の部屋からナタリヤの良人のロゴヂンスキーが這入つて來ました。

ロ『やあ、御機嫌よう。お變りもないかな』

ネ『御機嫌よう、義兄さんもお變りはありませんか』

ロ『話のお邪魔になりませんかな』

ネ『いゝえ、僕は何も隱さうとは思ひませんし、又た隱す事もありません』

義兄の顏を見ると、ネフリユドフは今までの温い心持がなくなつた。彼はロゴヂンスキーの野卑な感情に對して、豫てから反感を抱いてゐるのです。

ナ『えゝ、今、ドミトリの一身上の事を話して居りましたの。あなた、お茶を差し上げませうか？』

ロ『うむ注いでくれ。……それで、その一身上の話といふのは、何か特別の事件かね』

ネ『僕が墮落させたと思つてる女が、シベリヤへ追放されることになりましたから、僕も一緒に出掛けやうと思ふのです』

ロ『その事なら、同行するばかりでなく、それ以上の計畫があるやうに聞いてるたが——』

ネ『ええ、女が承知すれば、結婚するつもりです』

ロ『ぢやァ、やッぱりほんとうなんだな！どうです。君に差支ないのなら、さういふ決心をした動機を伺はうぢやないか』

ネフリユドフはカチユーシャに結婚を申込んだ動機を委しく物語り、それから

序でに監獄制度や土地私有制度を非難して、今後自分の採らうとする行動を説明しました。しかし、ネフリユドフの言葉が、ロゴヂンスキーに分らう筈はない。

ロ『しかし、ドミトリ君、君の言ふ事はまるで狂氣沙汰だ。今の時代で土地の所有權を廢止するなんて、そんな事が出來るものか。失敬ながら、君はまだ若いよ』

ネ『あなたは私一個人の事に就て言つてらッしやるんですか』

ロ『さうです。吾々は祖先から相續した土地や財産を現狀のままに維持して、それを子孫に傳へて行く義務がある』

ネ『しかし、私は土地を分配するのが、私の義務——』

ロ『まあ、待ちたまへ。僕は僕一個の事や子供達の爲めに左樣言ふのぢやない。僕は家族のものが安樂に生活するだけの財産は作つたし、子供だちも安樂にやつて行けるだらうと思ふ。で、僕の言ふのは君のやつてる事に就てだ。卒直に言ふと、君のやつてる事には熟考が足りない。書物を讀むのも可いが、もつと健

全な考へを以て讀むやうにして貰ひたいね」

ネ『どうか僕の事は僕の決心に任せて下さい。それから、どんな書物を讀まうとそれは僕の勝手です』

ネフリユドフは顏色を變へて、これだけ言ひましたが、自分にも何を言つてゐるか分らなくなつて來たので、口を噤んで、冷えた茶を飲み始めました。少時して氣が落ちつくと、ネフリユドフは姉の方へ向いて、

ネ『時に、子供だちは何うしてゐます』

ナ『子供はお祖母さんと一緒に家へ置いて來ました。あなたも子供の時分、人形が大好きだつたが、家の子供もやッぱり人形が好きで、一日人形を對手にして旅衣ごッこをして遊んでゐますよ』

ナタリヤは良人と弟の議論がお終ひになつたので、やッと安心しました。

ネ『姉さんは昔の事を何もかも覺えてゐますか？』

ナ『ええ、覺えてゐますとも。家の子供の遊んでゐるところを見ると、あんたの子供の時分にそッくりですよ』

先刻から不愉快な顏をしてゐたロゴジンスキーは、此時妻のナタリヤに向つて、

ロ『俺はもう寢る。二人でゆるりと話をするが可い』

ナ『あら、おやすみですか』

ナタリヤは良人の機嫌の惡いのを見て、おど〳〵してゐる。ロゴヂンスキーはネフリユドフに挨拶もせずに、さッさと次の部屋へ這入つて行きました。

ナ『ドミトリ。義兄さんに一言お詫をして下さいよ。私に免じて、ね？』

ネ『僕は何も詫を言ふ事はありません。僕は自分の正しいと信じる事を、正直に言つたばかりです』

ナ『でも、とにかく目上ぢやありませんか』

ネ『姉さんは僕の言ふ事と、義兄さんの言ふ事と、どつちが正しいと思ひます』

ナ『私はあなたの云ふ事が、少うし間違つて居ると思ひますよ』

ネ『姉さんも、よッぽど物が分らない』

ナ『だつて、あなたは——』

ナ『僕は之で失敬します』

ナ『それでは、やッぱりシベリヤへ行くんですか。私だつて、貴方の心持は、そりまア分らない事はないけれど……』

ネフリユドフは、何となくむしやくしやして、姉に別れを告げて下宿へ歸りました。

翌朝、目が覺めると、ネフリユドフは何よりも、昨日ロゴチンスキーと爭論して、氣を惡くさせたり、姉に氣を揉ませたりしたことを後悔しました。

『此儘にして出發する事は出來ない。もう一度訪ねて仲直りをして行かなければならない』さう考へましたが、時計を出して見ると、もう時間がありません。ヤ

スロワの加はつてゐる囚人の一隊は、午後の三時の汽車でモスクワを出發する筈でありました。で、遲くも十二時までには監獄へ行つて、その出發を見て、それから一緒に停車場へ行かうといふ考へですから、姉のホテルへ訪ねる時間がないそこで、ネフリユドフは、大急ぎで仕度を濟ませ、下男の一人と、それから矢張り一緒にシベリヤへ行くフヨドーシヤの良人のタラスとに頼んで、荷物を停車場へ送つて貰ひ、自分は辻馬車を呼んで監獄へと急がせました。

三〇、囚人の出發

馬車の中にぢッと坐つてゐても堪えきれないほど暑苦しい、時折り微かな風が吹いて來ましても、それは塵埃とペンキの匂ひに充ちたむん〳〵した暑い空氣を運んで來るばかり。

ネフリユドフが監獄へ着いた時は、もう一千人からの囚徒が、廣場に集まつて

出發を待つて居りました。此囚徒だちは、ぢり〳〵照りつける日光の下に列を作つて、三時間以上も立つてゐたのです。監獄の中庭で點檢をやつてゐる間に、門の外には、囚徒の荷物や病人の囚徒を乘せて行くために、二十臺ばかりの馬車がずらりと並び、その邊の曲り角には囚徒の親戚友人が群をなして、折があつたら一言でも別れの言葉を交さうと待ち構えてゐる。日本などでは到底夢にも見られない光景であります。

いよ〳〵出發の準備が整うと、護衛士官は帽子を脱いで、頭の汗を拭いて、胸のところで十字を切る。これは前にも復活祭の條に於て述べましたが、加特利克教や露西亞の國教の方では、よく十字を切ります。基督の十字架に象つた祈念の形でありませうが、勿論護衛士官は十字を切つたつて、基督の事なんか考へてゐやしません。

『進め！』

士官の號令で、護衛兵の銃がガチャ〳〵と鳴る。見送人が大聲に叫ぶ、振りかへつて叫びかへしてゐた男の囚徒達は、一樣に帽子を脱いで十字を切る。氣を取り亂して泣いてゐた女囚達も、同じやうに十字を切る。いよ〳〵出發です。囚徒の列は制服の兵士に圍まれて、砂埃をあげながら、練り出した。先頭が護衛兵、次が重罪犯人、次が流刑囚、その次が女囚、一番後が荷馬車と病人を乘せた馬車前列が見えなくなつた頃に、馬車が漸く動き出すといふ有樣。一番最後の馬車が動き出すのを待つて、ネフリユドフは待たせて置いた辻馬車に飛び乘りました。

女囚の列の所まで追ひ付くと、ネフリユドフは直ぐマスロワを見付け出しました。肩に雜嚢を背負つて、眞直に正面を視ながら歩いてゐる。その顏には落ついた決心の色が現れて居ります。その後から、百姓風に髪を結んだ若い綺麗な女が元氣よく歩いて行く。これがマスロワを親身の姉のやうに慕つて居るフョードシヤ「復活」の芝居を御覽になつた方は、御存知の筈です。

贈つた品物は屆いたらうか。マスロワはどんな氣持ちがしてゐるか。それを訊ねたいと思つて、ネフリユドフは馬車を下りて、女の方へ歩み寄りました。

『こら、話をしては可かん。傍へ寄つては可かん』

護衛の下士は大聲で怒鳴りつけましたが、歩み寄つた男がネフリユドフだと分つたので、ちよッと帽子の廂へ手をかけて立停つた。

下士『今は可けません。停車場へ着くまでお待ち下さい。途中は話をすることを嚴禁してありますから』さうして囚徒に向つて、『そんなにのろくさしては可かん……お前の雜嚢の口が開いてるぞ……おい、お前の頭髮に何か附いてる……こら色眼を使つちやァ可かん……』

下士殿もなか〳〵忙しい。

ネフリユドフは後から跟いて來るやうに馭者に言ひつけ、舗道へ寄つて、囚徒と同じ早足で歩いて居りましたが、何分にも暑くつてやりきれないので、四五町

ほど行つて、又た馬車に飛乘りました。が、强烈な日光がじり〳〵照りつける往來の眞中は、尙更暑い。とある歩道の屋臺店で、小學校の生徒らしい子供が、氷を飲んでゐるのを見ると、ネフリユドフは溜らなく咽喉が渴いて來ました。

ネ『おい、何か飲む所はないだらうか？』

馭者『直き向うに上等のカフエーがあります』

ネ『さうか、ちよッと其處へ寄つてくれ』

ネフリユドフはカフエーへ飛込んで、冷した曹達水を命じ、窓際のテーブルに向つて椅子に腰を下しました。と、向ふのテーブルに二人の客がゐて、その一人は色の黑い禿頭の男、その頭の具合が義兄のロヂンスキーによく似てゐるのを見ると、ネフリユドフは昨日の一件を思ひ出して、姉にも義兄にも今一度逢ひたくなりました。

『しかし、逢ひに行く時間はない。さうだ、手紙を書かう』

ネフリユドフは用箋と封筒を取り寄せ、曹達水を飲みながら、文言を考へて居りましたが、少時すると書き始めました。

『親愛なる姉上――昨日は義兄さんとあんな議論をして、姉上にも心配をかけてすみませんでした。お詫をせずに此儘出立してしまうのは、心残りでなりません』

『さあ、次に何を書いたものかな。許してくれと書いたものかな。いや、そんな事を書けば、ロゴヂンスキーは、きッと、自分があの說を撤回するのだと思ふだらう。そんな事は書けないぞ。……』さう思ふと、ネフリユドフは、義兄に對する反感がむら〳〵と起つて來て、書きかけた手紙を、ポケットへ押し込み、勘定を拂つてカフエーを出ると、又た馬車へ乘りました。

ネフリユドフが停車場へ着いた時には、囚徒達は既う一人殘らず鐵格子の窓のついた列車に乘り込んで居りました。

ネフリユドフは護衛の軍曹に心附けをして、特別に列車に近づくことを許され

且つ女囚の乘り込んでゐる車輛を敎へられましたので、直ぐと其車輛の方へ歩み寄り、窓の近くへ顏を寄せますと、汗の臭ひの籠つた、いきれ切つた熱い空氣がむッとして、女の甲走つた聲がはッきりと聞えました。

どの腰掛も、顏を眞赤にして汗をダラ〳〵流した白衣の女囚が一ぱいで、ネフリユドフの顏が窓に見えると、みんな物珍しさうに振り向きます。近くにゐる者は、話をやめて、わざ〳〵窓際へ寄つて來る。無理もありません。これからシベリヤへ流されるといふのですから、見納めにせめて都の若い紳士の顏を拜んでおかうといふのです。マスロワは白のジヤケツ一枚で、頭のハンケチも脫つて、向ふ側の窓のところに腰掛けて居りました。その少し此方に、フヨードシヤが居りましたが、ネフリユドフを見付けると、肱でちよッとマスロワの體をつッついて窓の方を指さしました。

マスロワはいそ〳〵と立ち上つて、赤く熱つた顏に微笑を浮べながら、窓際へ

來て、鐵格子の樓に掴まりました。

マ『まあ、何て暑いんでせう』。

ネ『贈つた品物は屆いたかね』

マ『え、、どうも有りがたう』。

ネ『他に何か欲しいものはないかね』

マ『ありがたう。何も欲しいものはありません』

フォードシャ『何か飲むものを貰つて下さることが出來ますかしら』

マ『さうね。飲むものを貰つて下さることが出來れば――』

ネ『ぢや、直ぐ護送の役人に頼んで貰つて上げやう。私達はニージニーへ着くまでは逢へないだらうね』

マ『あら、やッぱり貴方は、いらッしやるの?』

マスロワはさも嬉しさうにネフリユドフの顔を見詰めました。

ネ『私は次の汽車で行く』

マスロワはそれには何とも答へないで、ただ深い溜息を洩すばかり。そも〳〵人間の運命ほど不思議なものはありますまい。十二年前にライラックの藪蔭で手を握りあつた若い貴公子と無邪氣な田舍娘。それが一方は殺人罪に問はれてシベリヤへ追放となり、一方は其財産も地位も拋つて、女と艱難辛苦を共にしやうといふ。その出發の間際に、かうやつてモスクワの停車場で少時の名殘りを惜まうとは、誰れか想像することが出來るでせう。殊にマスロワは、一時はネフリユドフを怨みもし、憎みもして居りましたが、その心が分つて來ると、再びネフリユドフを戀しく想ひ始めました。しかし、ネフリユドフが其身分を捨てて、自分のやうなものを妻にしやうと言つてくれるのが、氣の毒でなりません。自分としては義理にも結婚を承諾することが出來ない。女の身として、おそらく想つてゐる男と夫婦になれないほど、辛い事はありますまい。汽車の窓に凭つて深い溜息を洩

したマスロワの心の中は、誠に同情に値するものがあります。

二人の間には少時沈默が續きました。

すると、男のやうないかつい顔をした年寄りの女囚が窓際へ寄つて參りまして、

女『あなた樣、十二人日射病で死んだといふ話ですが、本當ですか』

ネ『さあ、十二人とは知らなかつたが、二人だけは見たよ』

『奴等は此樣な炎天を引張り廻しやがつて、手にかけて殺したも同然ぢやありませんか。それでも奴等にやア何の處罰もないんだ。畜生めッ！』

ネ『女の中には病氣になつたものはないかね』

女『女はみんな丈夫ですよ。たッた一人產氣づいて、赤ン坊の出かかつてる女がありますがね。此次の車に』

マ『あなたの言葉に甘へて、私お願ひがありますわ。あの人があんなに苦んでるんですから、後へ廻して上げるやうに士官の方に賴んで下さいませんか』

ネ『ああ、宜しい。話して見よう』

マ『それから、もう一つ。フヨードシヤさんを御亭主に逢はして上げるやうにして下さいな』

ネ『宜しい、何とか賴んで見よう』

ネフリユドフは車窓を離れて、プラットホームを往つたり來たりして、やうやく護送士官を見付け出しました。

ネ『一寸お話があるんですが――』

士『なんですか？』

ネ『彼處に出產しかけてる女が一人居りますが、あれは後廻しにしてやる譯にはは――』

士『まあ、あれはあの儘に產ませてしまひませう。今度又たあんなのがあつたら注意することにして』

士官は手を振りながら自分の乗る車輛の方へ驅けて行きました。

その時呼子笛を持つた車掌が、其處を通つて行く。プラットホームに集まつた人々や、女囚の乘り込んだ車輛の中から、啜り泣きや祈禱の聲が聞え始めた。

ネフリユドフは、フヨードシヤの良人のタラスと並んで、車輛の一ッ一ッ通り過ぎるのを見送つて居る。やがて大勢の女囚の頭が窓際に重つてゐる一番目の車輛が通り、出產に苦む女の呻き聲がする二番目の車輛が通り、それからマスロワの乘てゐる三番目の車輛が來る。マスロワは他の女囚と一緒に窓際に立ち、淋しい微笑を浮べながら、ぢいッとネフリユドフの顏を凝視る。ネフリユドフはマスロワの姿を見えなくなるまで見送つて、それから停車場の一等待合室へと引返して參りました。

三一、淋しい門出

さて、一等待合室へ引返したネフリユドフは、自分の乘つて行く汽車が出發する迄にはあと二時間ありますから、この時間を利用して今一度姉のナタリヤに逢つて來やうと考へましたが、朝から色々の事に出逢つて、神經が疲れて居りましたので、待合室のソファーに腰をおろすと、思はずウトウトして、いつの間にかぐッすりと寢込んでしまひました。

少時すると、其處へやつて來ましたのが、手にナプキンを持つた一人の給仕人給『此のお方がさうだらう……もし〳〵、あなた樣、あなた樣はネフリユドフ公爵ではいらつしやいませんか。誰方か御婦人のお方がお尋ねになつて被居しやいます』

搖り起されて、ネフリユドフは驚いて飛び起きました。こんな所に寢てゐたのかと、眼をこすりながら、朝からのいろ〳〵の出來事を想ひ浮べると、鐵格子の窓につかまつて、淋しく微笑してゐるマスロワの顏が、まざ〳〵と幻に浮んで

來る。

しかし、眼の前の光景は、それとは全然異つて居ります。其處には花を一ぱい盛つた花瓶だの、銀色の燭臺だの、壺だのを載せた大きなテーブルがあつて、給仕人が素捷く歩き廻つて居る。室の突當りには色々の酒の罎を並べた棚、その前に大勢の旅客が此方へ背中を向けて立つて居ります。

ネフリユドフは亂れた心を落ちつけて、坐り直しました。その時、いそ〳〵と傍へ寄つて參りましたのは、姉さんのナタリヤ。

ナ『やうやうと搜し當てた』

ネ『よく來て下すッた。僕は立つ前にもう一度お目に懸らうと思つてたんです。さあ、此處へお掛けなさい』

ナ『さッきから來てゐたんですよ。アグラも來てゐます。ずゐぶん搜しましたよ』

ネ『つい寢込んで了つたもんだから、ちッとも知らずにゐました。本當によく來

て下さいました。實は手紙を上げやうに思つて、書きかけたんですがね』

ナ『ほんとうに？　何の用で？』

ネ『昨日お別れした後で、あんまり言ひすぎて惡かつたと思つたのですが、うッかりお詫びにあがると、義兄さんが何う取るか分りませんから、到頭上らずに了ひました』

ナ『私もね、貴方の心持はよく分つてゐましたよ。それは貴方だつて分つてゐるでせう。でも、貴方が良人と喧嘩なんかすると、わたしは仲へ這入つて困るんですからね。ドミトリさん、察して下さいよ』

ネ『分りました。いや、僕が惡かつたんです。僕は姉さんの心持ちには同情します……時に姉さん、今日監獄から此處へ來る途中で、囚徒が二人殺されましたよ』

ナ『殺されたつて？どうして？』

ネ『さうです？殺されたんです。此の暑い日盛りに、重い荷物を背負せて、引張

り廻したもんで、日射病に罹つて二人死んだんです」

ナ『まあ、さう？でも殺されたつて何ういふ譯なの？誰が殺したの？』

ネ『分りきつてるぢやありませんか。當局者が殺したんです。僕達はあんな不幸な囚徒が何樣な風に取扱はれてゐるか、少しも知らないでゐます。しかし、之は知つて置かなければなりません』

ナ『それで、あなたは之れから何をするつもりなの？』

ネ『出來る事なら何でもやります。實際まだ自分にも何をして可いか分りませんしかし、何か自分の力に相應な事をやらなければならないと思つてます』

ナ『よく分りました。さうしてコルチャギン公爵やミッシーさんとの關係は何うするつもり？　まさか此儘絶縁でもありますまいね。』

ネ『いえ、すッかり關係を斷ちます。』

ナ『それではミッシーさんが可哀相ですよ。私はミッシーさんが大好きなんだけ

れど、あなたが其樣な氣では仕方がないわね。それにしても、どうして貴方は其樣に自身の身を束縛しやうと思ふの？なぜ、シベリヤなんぞへわざ〳〵苦みに出掛けるの？』

ネ『行かなければならないから、行くんです。』

ネフリユドフは卒氣なく答へましたが、思ひ直して、幸ひ老女のアグラのゐる所で、一層强く自分の決心を姉に向つて說明しておかうといふ氣になりました。

ネ『姉さんの言ふのは、僕がカチユーシャと結婚しやうといふあの事ですか？そんなら姉さんも知つてらッしやる通り、僕はすッかり決心を固めてゐます。しかし、姉さん、カチユーシャの方では、何處までも拒絶するんです。カチユシャは私が犧牲を拂うのを何うしても受けやうとしないのです。あの境遇にゐる女としては、珍しいくらゐ、自分一身の利害を捨てて、却て僕の爲めを思つてゐるのです。けれども、たとへそれが一時の意地づくであるにしても、僕はさうかと言つ

て手を引くことは出來ません。僕はカチューシャが何と言はうと、何處までも一緒に行きます。さうして力の及ぶ限りカチューシャを慰めてやらうと思ひます」

ナタリヤは、ネフリユドフの此言葉に對しては、何とも言ひませんでした。老女のアグラはけげんな顔をして、二人を眺めて、頭を振りました。

ネ「姉さん、この人が僕の同伴者です」

ネフリユドフは待合室を出て、雜嚢を擔いだタラスと一緒に歩き出しながら、ナタリヤに向つて言ふ。タラスの事は前にもネフリユドフから話した事があるので、ナタリヤは知つて居りました。やがて一同は三等車の前までやつて來ました。

ナ「三等ぢやないんでせう？」

ネ「いえ、三等で行くことにしました。タラスと同車するつもりです。それから姉さんに一つお話しておく事がありますがね」

ナ「何？」

ネ「あのクスミンスキーの地所ですが、あれはまだ百姓達に分配して了ひませんから、もし僕が死んだら──」

ナ「なんです、ドミトリさん、そんな事を！」

ネ「眞面目に言ふのです。僕に萬一の事がありましたら、あの地所は貴方の子達が相續すれば可いのです。それから其他の財産も、全部姉さんの子供達に讓ります。僕は讐へカチューシャと結婚しても、子供は出來ないでせうから」

ナ「そんな事を言ふものぢやありませんよ」

とナタリヤは言ひましたが、弟の言葉を聞いて、如何にも嬉しさうな顔付をした。其處は人間ですから慾がある。自分の子供に立派な財産を讓られると思ふと、惡い氣持ちはしなかつたでせう。

車掌が客車の扉を一つ〳〵閉めながら旅客を促き立て始めたので、ネフリユドフも急いで車内へ這入りました。

ナタリヤはアグラと並んでプラットホームに立つて居りましたが、少時は別れの言葉さへ口に出ませんでした。ナタリヤとネフリユドフは、お互に他人同士のやうな妙な心掛ちになつて居りました。で、汽車が動き出すと、ナタリヤはほツとした。さうして急に優しい悲しい顏付になつて、やッとの事で、『左樣なら、左樣なら』とだけ言ふことが出來ました。

ネフリユドフの方も、以前には姉に對して何の隔てもない、温い心を持つてゐたのですが、今は姉に向うと、妙に氣がむしやくしやして不愉快を覺えるので、別れるのを却つて快く思ひました。ネフリユドフに取つては、ナタリヤは昔の姉ではない。自分に一番親しかつたナタリヤは既う何處かへ消えてしまつて、その代りに外國人のやうに心持ちの離れた俗惡無智な男の奴隷になつてゐるナタリヤが、此處へ來てゐるのだと、ネフリユドフは感じました。殊に其良人に利益のある話――財産相續の話をした時に、姉の顏が喜びに輝いたのを見て、ネフリユドフは、はッきりと其の心持ちを讀んだのであります。

兄弟は他人の始めなぞと言ひまして、かうしてお互の理解を缺くために、骨肉が疎遠になつて行くのは、小說中の出來事にしても誠に遺憾であります。新しい生涯に入らうとして、何千里を隔てるシベリヤへ出發するといふのに、たッた一人の姉すらも自分の心持ちを理解してくれないかと思ふと、ネフリユドフの心の中は、どんなに淋しかつたでありませうか。

三二、二ツの愛

前回に申上げた通り、ネフリユドフは淋しい心持ちを抱いてモスクワの停車場を出立し、マスロワの跡を慕つて參りましたが、汽車の中で種々雜多の勞働者と交際つて見ますると、始めて勞働生活の純潔な利益や歡喜が分り、愚劣な卑むべき利益を占めて怠惰な生活を送つてゐる上流社會を忌々しく思ふ心が段々と募

つて行くと同時に、自分の今まで知らなかつた新しい美しい世界を發見した旅行者の喜悅を、段々と深く感じるやうになりました。

モスクワを距る三千浬ばかりの所にベルムといふ都會がありまして、マスロワ等一隊の囚徒は此處までは汽車や汽船の旅を續けた。此ベルム市へ着くと、ネフリユドフは早速官憲に運動して、マスロワを國事犯人と一緒に起き臥しさせる許可を得ました。國事犯は普通の犯人よりも待遇がよく、食物も上等でありますから、マスロワの境遇は以前に比べるとずッと善く成つた。これまでのやうに、蚤や虱に苦しめられたり、野獸のやうな人間にうるさく附纏はれる憂ひもなくなつた。が、何よりも一番善かつたのは、人格の高い色々の人物を知り合つて、その爲に非常に有益な感化を受けたことであります。

尤も、マスロワは休息の場合は國事犯人と一緒にゐることを許されましたが、途中は普通の囚徒に交つて歩かせられた。マスロワの他に、國事犯人がもう二人

交つて居る。一人はネフリユドフが監獄にゾーネワを訪ねた時、その注意を惹いたマリヤといふ綺麗な娘、今一人は、やはり其時に見知つた青年シモンソンです。マリヤは姙娠の女囚人に自分の馬車の席を讓り、シモンソンは馬車に乘る特典を放棄することを正しいと考へて、歩いてゐる。いづれも立派な心掛けの人物。で、マリヤ、シモンソン、マスロワの三人は、いつも朝早く刑事囚等と一緒に出立しその他の國事犯人は後から馬車で出掛ける。さうして大きな町へ着きますと、護衛士官が交代して囚徒の一隊を引受けるといふ次第。

六年間も墮落して生活を續けた上に、幾月かを刑事囚と共に收監された揚句でありますから、國事犯人と一緒に暮すのは、カチユーシヤのマスロワには大變幸福に思はれました。殊に新しい仲間との交りは、これまで夢にも知らなかつた面白味の多い生活を展開したのであります。

マスロワは、此等の人々が罪を犯した動機を雜作もなく理解することが出來、

自分自身も其罪人の一人であるだけに、此等の人々に深い同情を尊敬とを拂ひました。で、マスコワは新しい仲間とは誰れ彼れの別なく懇ろにしましたが、別けてもマリヤとは親しくなつた。此マリヤといふのは、富裕な將軍の令孃で、三ケ國の言葉を自由に繰るといふ才女。父の死後、兄から分けて貰つた財産を悉く捨てゝ、進んで女工生活を始めたくらゐですから、見榮なぞは少しもない。自分の縹緻の好いことを知つて居りますが、その爲めに男の目につくことを喜ばない。男と戀に落ちることを心の底から厭ふてゐる。斯うした性格の女を、マスロワは生れて始めて知つた。で、日を經る毎に、マスロワのマリヤに對する尊敬と愛慕の念は、益々深くなつて行きました。

或日の事、マリヤはマスロワと連れ立つて歩きながら、自分の身の上話をした末に、

マリヤ『マスロワさん、あたしは貴女にあやまらなくッちやなりませんのよ。實

はね。貴女が斯うして特別に私達國事犯の方へ御一緒におなんなすつたのが不平でしたのよ。私達は無論平等平義ですけれど、何だか貴女と御一緒といふことが私達の汚れのやうな氣がして、あんまり打ち解けられなかつたんですの。それが此頃から段々、貴女の御經歴に似ず清い立派なお心だと知れて來て、私實は恥ぢ入つてゐましたですからね、どうか之れからは何もかも打ち明けて、お互に扶け合つて、この可哀相な囚徒のために盡してやりませうね。私の量見の狹かつたのを勘辨して頂戴な』

マ『マリヤさん、何をおつしやるかと思つたら、そんなつまらない事を、勘辨も何もありはしませんわ。私こそ、こちらへ御一緒になつてから、別の世界へでも來たやうで、今までちッとも知らなかつた人間の貴い仕事が分るやうになりました。これなら私、なまじッか向ふにゐたよりも、罪人になつて此處へ流された方が、よッぽど有りがたかつたと思ひます。みなさんの方が世間の人よりもずッと

立派な方ですわ。どうぞ此先もみんな御一緒で、いろ〳〵の事を教へて戴きたいのですよ』

これはお世辭でもなんでもなく、マスロワの心の底から出た言葉でありました。マスロワはマリヤを神の如く敬ひ、戀人の如く愛慕するやうになつたのです。それに二人は戀愛に對する嫌惡の情を共有してゐる爲めに、一層仲がよくなりました。カチユーシャの方は、戀愛の恐ろしさを充分に經驗して來てゐるので戀愛を厭ひ、マリヤは全く戀愛の經驗がないので、一種不可思議なものとして、人間の品位を傷ける忌むべきものとして、戀愛を考へてゐた。此共通の心持ちが二人の仲を固める楔となつたのであります。

マスロワは又たシモンソン青年から非常な良い感化を受けました。尤も、マリヤの感化は、マスロワがマリヤを愛慕してゐたが故に生じたのでありますが、シモンソンの感化はシモンソンの方でマスロワを愛したが故に生じた。此點が異つ

てゐる。

シモンソンは小學生の時分、自分の父親が不正な金儲けをしたのを聞いて、そんな金は當然人に施してしまはなければ可けないと言つて、父親に迫り、父親に叱りつけられると、それなり家出をして、それからは一切父の世話にならなかつたといふ清廉潔白な人物。その後、彼は有らゆる現代の罪惡は人民の無智に原因すると悟つて、大學を卒業すると同時に人民黨に加盟して村の學校長となり、生徒や農民に向つて、自分の正しいと信ずる所を大膽に敎へた。その結果、彼は官憲に捕縛されて裁判を受けましたが、その時、彼は人間は人間を裁く權利がないと言つて、裁判官に何を訊問されても、一言も答へなかつた。

シモンソンは自家一流の宗教を持つて居ります。天地萬物には悉く生命があるといつて死んでゐるものはない。石ころでも朽木でも、人間の理解することの出來ない絶大無邊の有機體の一部分である。人間も亦た其一部分である。故に人

間の爲すべきことは、大有機體の生命を保存することである。天地萬物の生命を保存することである。シモンソンは斯う信じて居つた。

此意味からシモンソンは戰爭や死刑や肉食に極力反對したのであります。しかし、かういふ强い人格の青年でありますが、柄にないはにかみ屋で、何事にも控え目がちでありました。尤も一旦かうと決心したとなると、何物も彼を動かすことが出來ない。孟子の所謂千萬人と雖も吾れ往かんといつたやうな眞の勇氣を持つて居る。

此シモンソンが監獄でカチューシャと相見てから、すッかりカチューシャに戀着した。しかし、普通の人間の惚れたはれたではありません。カチューシャの方でも、シモンソンを一目見ると、忽ち其人格の威力に惹き付けられてしまひました。女の本能で、自分が此異常な青年に愛されてゐることが分りますと、それまでは自暴自棄であつたカチューシャが、非常な自重心を甦らせた。此樣な男の

愛を呼び起すことが出來れば、自分は決して失望するには當らない。どうかして自分も立派な人間になつて、此人の愛に酬ゐなければならぬ。かういふ決心を起したのが、抑もカチューシャの向上の動機であります。

三三、意外の申出

お話代つて、ネフリユドフは、最初の内こそ、カチューシャ、マスロワが昔の自暴自棄な自墮落な氣持ちに復りはしないかと、道中も其事ばかり心配して居りましたが、此頃ではカチューシャの樣子が段々と變つて、會ふ度び毎に容貌に氣品が備はつて來た。それから自分に對しても何の飾り氣も、ひがみもなく心から自分の親切を感謝してくれる樣子。それを見てネフリユドフは非常に嬉しく感じました。

トムスクを出發してから、囚人の一行は都合六ヶ所で休息を致し、此間に護衛

士官も度々交代致しましたが、どの護衛士官も面會を許しませんから、ネフリュドフはもう一週間といふものカチューシャの顏を見ません。これは高等獄吏が巡視して來るといふので、急に嚴重になつた譯です。丁度六つ目の休息地で、ネフリュドフは手紙を書くやら其他いろ〳〵の用事を足した爲めに、宿を立つのが例よりも遲れ、到頭途中で囚徒の一隊に追付くことが出來ずに、日の暮れ方に次の休息所のある村へ着きました。ところが高等獄吏は一隊を巡檢せずに行つて了つたと聞いて、ネフリュドフは、此分ならば今度交替した護衛士官は面會を許してくれるに違ひない、かう考へまして、宿屋の一室へ通つて茶を一杯やり、一人の若い勞働者を道案内として村端れの休息所へと出掛けることに致しました。

生憎暗い晩で、濃霧の爲めに空は全く見えない。案内の男が三歩も先になりますと、人家の窓からでも灯の光りが洩れて來なければ其姿さへ見えないといふ有樣コールターで、黑光りをさせた重い長靴に、深い水雪を踏んで、會堂前の廣場へ差しかかると、闇の中に明るい窓が幾つも連なつてゐるのが見え出しました。

ネ『あれが休息所かね』

男『さうだよ。教會堂を通り越すと、二階屋があるからね、その二階屋から二番目でさあ、おお、さうだ、俺の杖を貸して進ぜよう』

ネ『御苦勞だつた』

男『大丈夫かね、迷子になりやしまいね。それぢやァ行つてお出でなせえ。俺はこれからレコの所へ行つて、一杯やるだァ』

ネフリュドフは自分の丈より高い杖を、案内の男から受取つて、休息所を指してやつて參りました。

番兵の誰何に答へて、門の前に待つて居ります。少時して、當番の軍曹が出て來た。

軍『此方へお出でなさい護衛士官殿の事務室へ御案内します』

ネフリユドフは軍曹の後に跟いて、事務室に這入つて行きますと、小さなランプを點した玄關の間に長靴を片足だけ穿いた兵士が、も一つの長靴を團扇の代りにして、頻りと湯沸し釜の下をあほいで居りましたが、ネフリユドフの姿を見て起ちあがり、手傳つて外套を脱がせてから、奥の一室へ這入つて行きまして、

兵『護衛士官殿、あの方が見えました』

士『さうか、此方へお這入りなさいと言へ』

兵『公爵、どうか此方へお這入り下さい』

護衛士官はオーストリア風のジャケツを着けて、テーブルに向つて腰かけてゐる。そのテーブルの上には晩食の食ひのこりと、二本の酒の罎が載つて居り、むつとするほど温かい室の中には、煙草と安香水の匂ひが漂つて居ります。士官はネフリユドフを見ると、起立して、

士『何の御用事ですか。おい當番、湯沸しは何うした。何をしてゐるんだ』

兵『はア、直ぐ持つて參ります』

士『直ぐだぞ、直ぐといふ言葉を覺えておけ』

兵士が湯沸し釜を運んで來ました。唯だ湯沸し釜ではお分りになりますましいこれは露西亞語でサモワールと稱えまして、形こそ違ひますが、丁度七輪と銅壺を一緒にしたやうな錫製の器で、これをテーブルの上に据え、それで湯を沸して茶を入れる。冬の夜などは此サモワールの周圍に、客が集まつて、四方八方の話に花が咲かうといふ、ロシア人の生活にはなくてならないものの一つであります。

さて、護衛士官は、サモワールの湯を汲んで、茶をいれ、それをネフリユドフ倩めまして、

士『何の御用ですか、伺ひませう』

ネ『ある囚徒を訪問させて戴きたいのです』

士『國事犯ですか、それならば法律で禁じられて居ります』

ネ『いや、私の面會したいのは婦人で、國事犯ではありません』

士『さうですか、まあお掛けなさい』

ネ『ありがたう。その女は國事犯ではありませんが、私が係りの方にお願ひして國事犯人と一緒にして貰ひました』

士『あ、さうですか、それなら知つて居ります。よろしいです。どうにか致しませう』

ネ『是非とも今夜面會したいのですが――』

士『夜は長いです。まだ時間は充分にありますよ。此所へ來るやうに言つてやりませう』

ネ『あの女のゐる所で面會は出來ませんかしら』

士『國事犯人の室でですか？それは困りますがなァ』

ネ『私は之まで幾度も許されました。何か危險があるといふお疑ひならば、どうぞ私の體を檢べて下さい』

士『いや、それには及びません。それでは特別に取計らひませう。おい、當番！』

士『はァ』

士『この方をワクロフ軍曹の所へ案内しろ。國事犯の別房へお通し申すやうにさう言へ。點呼の時間まで居られても差し支へない』

ネフリユドフは當番の兵士と一緒に先刻の軍曹の所へ參り、その案内で國事犯人の收容されて居る別房の廊下まで參りますと、護謨のジャケツを着け、松薪を手に持つてストーブの前に蹲んで居りましたシモンソンが、

シ『よくお出でなすつた。私は貴方に話したいことがある』

ネ『さう？一體何です』

シ『あとにしませう。今は忙しいから』

シモンソンは再びストーブに向つて彼れ一流の理屈に從つて、火を焚し始めた

其處へ丁度マスロワが別房の戸口から出て參りました　白いジャケツに白いスカート、裾をたくしあげて、頭巾を目深にかぶり、樺の箒で塵をストーブの方へ押しやりながら、這入つて參りましたが、ネフリユドフを見ると、顏を赤くして、箒を捨て、裾で手を拭いてネフリユドフの前に立ち止りました。

ネ「掃除かね」

と言ひながら、ネフリユドフは握手をする。

マ「え、、あたしの昔の仕事ですわ。でも此樣な甚い塵埃つたら有りやしませんわ。」とにこ〳〵して、それから今度はシモンソンに向ひ、

マ「ねえ、着物は乾いて？」

シ「大抵乾いたよ」

シモンソンは異樣な目附きでマスロワを眺める。ネフリユドフには、それがぎつくりと胸にこたへた。

マ「さう。それを仕舞つて、外套を持つて來て乾しませう」

それからマスロワは第二の戸口へ這入つて行かうとしましたが、ネフリユドフの方を向いて、第一の戸口を指さしながら、

マ「あなた、みんなが此處に居りますわ」

ネフリユドフは扉を開けて、小さな別房へ這入りました。其處には一隊中の國事犯人が大抵集まつて居りました。古い知り合ひのヅーホワ、それから例のマリヤ男ではコンドラチエフ。クリルツオフ。ノウヲドウヲーロフなどといふ革命黨の錚々たる連中が居る。此人々に就いては、いろ〳〵悲慘なお話や、痛快なお話がありますが、それは省略いたします。

ネフリユドフが這入つて行きますと、隅ッこの方で髮の美しい小さな女の兒の世話をしてゐたマリヤが、例のあどけない顏をふり向けまして、

マリヤ「おや、よく入らしたこと。カチユーシヤにお逢になつて？私達のとこに

もお客さまがあつてよ」

マリヤのお客様といふのは、件の小さな女の兒で、これは或る刑事囚の子供でありますが、マリヤが不憫に思つて、その世話を引受けてゐる。

やがてストーブが暖かになりますと、お茶がはいる。パンやバタや茹玉子や積の脚などがテーブルの上に並ぶ。一同は其周圍へ寄つて來て、話をしながら食べる。熱い茶を吹きながら飲む。寒いジメ〳〵した道中をして來た一同は、これで漸く元氣を回復し、少時の間は自分の境遇も忘れて、快活に談笑する。

ネフリユドフは、いつもの通りカチユーシャと差向ひで内證話をしようと思ふのですが、なか〳〵折がありません。そのうちに連中は宗教論や政治論を始める。いづれも一騎當千の論客でありますから、互に自分の説を主張して他に下らない。西比利亞の雪の中の小さな小舍でも、どうして何處かの國の議會なんかよりも、餘ッ程しッかりした議論が聞かれる。しかし、此人々の議論を申上げて居

りますと、長くなりますから、これも遺憾ながら省くことに致します。

尤も、ネフリユドフは、先刻から議論なんか可い加減によしてくれゝば可いがなと、思つてゐる。いや、思つてゐると原作に書いてはありませんが、思つてゐるだらうと演者は思ふ、苦勞してカチユーシャに逢ひに來たんですから、早くサシになつて積る話をしたい。淨瑠璃の文句ぢやないが、逢はずに去んでは此胸が……と言つたやうな譯であらうと想像いたします。これで演者もなか〳〵想ひやりがありますテ……

三四、戀か愛か

さて、國事犯の連中が議論に花を咲かせて居りますと、隣りの室に役人達の聲が聞えまして、間もなく一人の軍曹が、二人の護衛兵を從へて這入つて參りました。

軍『點呼だ。みんな靜かにしてゐなけりやゝ可かん』

鶴の一聲。シベリヤの山の中なら軍曹の聲だつて鶴の一聲です。一同は靜粛になる。當番軍曹人員を一々數へまして、ネフリユドフの番になりますと、急に鄭寧になつた。此先生、除隊になつたらネフリユドフ公爵の世話にならうといふ下心。何處の國にだつて斯ういふ拔目のない手合が居ります。

軍『點呼後は此處に入らしては困ります。公爵、なるべく早くお切りあげを願ひます』

ネフリユドフも近頃は這般の消息を心得て居りますから、軍曹の傍へ寄つて三ルーブルの紙幣をそッと摑ませました。ルーブル紙幣も近頃では一枚十錢ぐらゐで銀座の夜店あたりに賣つて居りますが、其頃の三ルーブルは相當に使ひ出がありました。

軍『あ、さうですか、誰かが閣下に何か用事があると被仰るのですか？お望みな

ら、御緩くりなすつて構ひません』

現金な男もあればあるもの。

此軍曹が出て行かうとすると、入れ代りに今一人の軍曹が、髯をぼう〳〵生やした、目の下に打傷のある男囚を連れて這入つて來ました。

囚『私は娘の事で參りやしたのでございやす』

『あ、お父ちやんが來た！』と叫んで、カチユーシヤとマリヤの後から飛び出したのは、可愛らしい女の兒。

囚『ああ、ゐたな、お父ちやんだよ』

于『小母ちやん達があたいにお衣服を拵えてくれるとこなの、綺麗なんだよ。お父ちやん。赤いんだよ』

囚『可かつたな』

マリヤ『小母ちやん達と一緒にねんねしたいの？』

子『ええ、ねんねしたい。お父ちやんもね』

マリヤ『お父ちやんは駄目よ。この兒は私達が預りますから』とマリヤは囚徒の方へ振り向いて言ふ。

『さうだ、お前は其兒を預つて置くが可い』

と最初の軍曹はマリヤに言つて、同僚と一緒に室を出て行く。囚徒の眼には涙が溜つて居りました。

先刻から手枕をして口を利かずにゐたシモンソンが、此時むツくと起き上つて仲間の間を縫つて、ネフリユドフの傍へやつて來ました。

シ『ちよツとお耳を貸して戴けませうか』

ネ『宜しい。何ですか』

ネフリユドフはシモンソンに從いて室を出て行きました。カチユーシャは吃驚して見上げましたが、ネフリユドフの目と出會すと、顏を赧くしてうつむきました。

廊下へ出ると、シモンソンはネフリユドフに對ひまして、

シ『私がお話したいといふのは斯うなんです。私は、貴方とカチユーシャとの間柄を知つてゐますから……』

向う側から刑事囚の騷々しく罵る聲が聞えて來る。

『やい、木偶の坊、俺んぢやねえや』

『何を！糞野郎、土堤腹けやぶるぞ』

『こら、よさねえか。なんだ、手前だちは』

あんまりやかましいので、シモンソンは肝腎の話をする事が出來ません。と、此時マリヤが廊下へ出て來まして、

マ『こんな所で話が出來るものですか。あすこへお出でなさい。ゾーホワがたつた一人ゐるだけですから』マリヤは隣の入口を通つて、小さな部屋へ這入つて行

く。『ゾーホワは頭痛がするつて、眠つてゐますから、あなた方の話は聞きはしません。私は彼方へ行きませう』

シ『行かないで此處にゐて下さい。私は誰に秘すこともない。勿論、あなたにはない』

マ『ええ』

マリヤは奥の方へ行つて、寢臺棚へ腰をかけました。その美しい目は何處か遠くの方を眺めてゐるやう。

シ『ところが、私の用向といふのは斯うです。私は、貴方とカチユーシヤの間柄を知つてゐますから、どうしても私とあの女の間柄を、貴方にお話しておかなければならないと思ひます』

ネ『といふのは？』

シ『私はカチユーシヤ、マスロワと結婚したいと思ふんです』

マ『あら！貴方が？不思議だこと！』

シ『ですから、公爵、私はあの女に結婚を申込まうと決心しました』

ネ『私が何うしませう？それは彼女次第です』

シ『さうです。しかし、あの女は貴方といふものがあるばかりに、決斷が出來ますまい』

ネ『どうしてですか』

シ『どうしてと言つて貴方との關係がはッきりしない中は、あの女は心を定めることが出來ないですよ』

ネ『私の關係してゐる範圍では、その問題は既う落着してゐるのです。私は自分の義務と考へてゐることを實行して、あの女の運命を明るくしてやりたい。しかし、決してあの女を束縛しやうとは考へません』

シ『さうでせう。が、あの女は貴方の犧牲を受けることを望みません』

ネ『犧牲ではありません』

シ『それでも、あの女の決心の變らないといふことを、私はよく知つて居ります』

ネ『それなら私にお話しなさるには及ばないでせう』

シ『いや、あの女は自分が思つてるやうに、貴方にも思つて戴き度いと言ふのです』

ネ『あの女は自由です。私は自由ではないが、カチューシャは自由です』

シモンソンは口を噤んで、一寸考へてゐました。

シ『それなら當人に話しませう。私の彼女に對する戀は、普通の戀ではありません。私は、あの女を、苦勞をし拔いた立派な人間として愛してゐるのです。私はあの女から何物をも求めません。唯だあの女を助けて、その前途を明くしてやりたいと、心の底から思つてゐるのです……』シモンソンの聲は顫えました。『あの女の生涯を幸福にしてやりたいと思ふのです。あの女が、貴方の助けを受け度くないのなら、私が代つて助けてやりませう。四年の刑期は長くはありません。傍に住んでゐて自分の力に出來るだけの事をしたら、あの女の運命を明るくすることが出來るでせう……』

ネ『私は何と御挨拶して宜しいか分らない。カチューシャが貴方のやうな保護者を得たのを、私は大變に嬉しく思ひます』

シ『その事を私は伺ひたかつたんです。カチューシャを愛し、その幸福を望まれる貴方が、私とあの女との結婚を何うお考へになるか、それを伺ひたいのです』

ネ『勿論、結構な事だと思ひます』

ネフリユドフはきッぱりと答へました。

シ『何もかもあの女次第です。それでは、あの女に話しませう』

シモンソンが彼方へ行つてしまうと、マリヤがネフリユドフの傍へ寄つて來ました。

マ『貴方は何う思ひます？あのシモンソンが戀をしようとは、ほんとうに思ひがけない。それも馬鹿々々しい、子供じみた戀の仕方！』

ネ『ですが、カチューシャは何う思つてるでせう』

マ『あの人？さうね。御存じの通り、過去は何うあつたにしろ、あの人は非常に固い人です美しい感情を持つてゐます。あの人は貴方を愛してゐます。確かに愛してゐます。從つて自分ゆゑに、貴方が累されることがないやうに、自分を捨てゝまでも、貴方の爲めを圖り度いのです。貴方と結婚することは、あの人に取つては、過去の總ての墮落よりも惡い、恐しい墮落ですから、あの人は決して貴方との結婚には同意しますまい。けれど、貴方がゐると、やッぱりあの人の心は亂れます』

ネ『それでは、私は何うすれば可いのです』

シ『何もかも、あの人に打ちあけておしまひなさる方が宜しいと思ひますわ。何事もはッきりとして置くのが一番です。あの人とお話しなさい。呼びませうか』

ネ『ええ、どうぞ』

マリヤは出て行きました。眠つてゐるゾーホワと二人きりになつて薄暗い部屋に待つてゐると、ネフリユドフは變な感じに襲はれました。シモンソンの申込みの爲めに、自分のカチューシャに對する犧牲の値打が急に下落したやうに思はれて來ました。それには勿論、嫉妬心も含まれてゐたに相違ありません。カチューシャが自分を愛してゐると思ひ込んでゐたのですから、そのカチューシャが他の男を愛すことが出來やうとは、ネフリユドフは何うしても思ひたくない。そんな譯で頻りと考へ込んで居りますと、扉が開いて、カチューシャが活潑に這入つて來ました。

カ『マリヤさんが私を呼びに來ました』

ネ『ああ、お前に話さなければならないことがある。まあ、お座り。シモンソン

から話があつたよ』

シモンソンの名を聞くと、カチユーシャは顔を緋くした。

カ『あの人が何を申しまして？』

ネ『お前と結婚したいと言つてた』

カチユーシャは何とも答へずに目を伏せました。その顔には確かに必の苦痛が表れてゐたやうです。

ネ『シモンソンは私の同意——と言つて悪ければ——助言を求めたのだ。私は、それは全然お前次第だ。お前が決斷すべきことだ、と言つてやつた』

カ『まあ、それは一體何ういふことなの？どうして？』

二人は眼と眼を見合せました。此時カチユーシャの眼に口に言ひ盡せない或る心持ちを語つて居りましたが、ネフリユドフは其意味を何う取つたでせうか。彼は無理に言葉の調子を落ちつけまして、

ネ『お前は決定しなくッちや可けない』

カ『何を決定するの？何も彼も前から定まつてますわ』

ネ『いや、お前はシモンソンの申込みを承知するか、しないか、それを定めなくッちやならない』

カ『私が何ん　奥さんになれて？私のやうな罪人が？』

ネ『しかし、もし宣告が取消されたら？』

カ『ああ、もう構はないで下さいまし、あたくし、もう申上げることがありません』

カチユーシャは急に起ちあがつて室を出て行きました。

三五、瀕死の囚人

休息所の門を立ち出でたネフリユドフは、深い溜息をつきました。

シモンソンやカチユーシャとの會談は、彼に取つて誠に意外であり、重大でもありましたが、彼には其事を深く考へることが出來ませんでした。

やがて、ネフリユドフは宿へ歸つて、暗い窓をコツ〳〵叩いた。先刻の勞働者が跳足で出て來て扉口を開けてくれました。

内へ這入ると、正面の室には、聖像の前に赤いランプがしよんぼりと點り、苦蓬と汗の臭がして、襖の向ふに誰か肺の大きな人が高鼾をかいて居りました。ネフリユドフは着物を脱いで、長椅子の上へ旅行用の革枕を置き、其處へ毛布を擴げて横になりました。が、三ヶ月の間見聞して來た慘めな、囚人生活の印象が、あり〳〵と心に浮んで來て、どうしても拂ひのけることが出來ませんでした。

それからネフリユドフは刑罰制度の恐ろしさをつく〴〵考へました。刑罰制度といふものは、墮落と惡德を作り出す爲めに、さうして一つにこねあげた墮落と惡德を、全人民の間に傳播する爲めに、故意と工夫されたもののやうに思はれま

した。

監獄生活をしたものは、自分の經驗から割り出して、教會や道德家の說く理屈は、實際生活には當て嵌まらないものだと思つてゐる。從つてそれを守る必要はないと思つてゐる。監獄制度は、犯罪を防止し、犯罪の怖ろしさを知らしめて、犯人を矯正するのが目的だといふ。けれども實際には、惡德は防止されるどころか、却て蔓延する。犯人は矯正されるどころか、却て惡くなる、社會に對して益復讐心を起す。或者は、監獄制度の弊害は、監獄の設備が惡いからだといふ。しかし、ネフリユドフは斯ういふ議論には滿足が出來ません。彼は、殘虐な頑固な典獄や看手や護送兵が、人民から取り上げた稅金から俸給を貰つてゐながら、同胞であるところの犯人を動物同樣に取扱つて、その肉體のみならず精神をも滅ぼして了うことを考へると、熱烈な憤慨の情を起しました。

『そんなら、これは役人どもの誤解から生じたものであらうか？此等の役人に俸

給を與へ、賞與を與へて、現に其等の人間のやつてゐることを全然やめさせる譯には行かないものだらうか？』とネフリユドフは考へました。

動くたんびに體の周圍に蛋が跳びあがるやうに思はれましたが、こんな事を考へてゐる中に、頭が疲れて來て、深い眠りに落ちてしまひました。

翌朝ネフリユドフが目を覺した時は、荷馬車の馭者達が、もうとツくに宿を立つて了つた後でありました。宿屋の主婦が汗ばんだ頭をハンケチで拭きながら這入つて參りまして、

主婦『旦那さま、お目ざめで御坐いますか。先刻、休息所から兵隊さんが此のお手紙を持つて參りました』

ネ『どれ……マリヤから來たのか……ありがたう』

その手紙を手に取つて、封を切つて讀んで見ると、『クリルツヲフの容體が非常に悪い。私達はクリルツヲフは此處へ留らせやうと思つて、いろ〳〵護衛士官に

賴んで見たが、許してくれません。仕方がないから連れて行きますが、全々容體が悪くなるでせう。次の町で、あの人が殘されるやうでしたら、私達の中誰か一人殘れるやうに取計らつて下さい。滯留の許しを得る爲めに、私があの人と結婚する必要があるやうなら、無論、私は結婚する覺悟です』といふ文面。此クリルツヲフといふのは、南ロシヤの大地主の一人息子でありましたが、大學にゐる頃友達の革命黨員に金を呉れたばかりに、官憲から逮捕されて監獄に入られた。ところが獄中で或青年が殘虐な死刑に處せられるのを見てから、激烈な革命家となり、遂には露國政府の顚覆を目的とする破壞黨の首領に撰ばれて盛んに活動いたしましたが、腹心の者の裏切りによつて捕縛され、何年か未決監にゐて、其の揚句、無期徒刑に處せられた人物。彼は獄中で肺病に罹り、シベリヤへ來てからは病勢が次第に險悪となつた。ネフリユドフは此青年を殊の外好いて居りました。

さて、マリヤの手紙によつて、青年の危險な容體を知つたネフリユドフは、宿

屋の主婦に勘定を拂つて外面へ飛び出し、馬車も呼んで、出來るだけ急い馬を走らせるやうに馭者に吩咐けました。村を出離れて少時行くとネフリユドフは漸くクリルツヲフが運んで行く馬車に追ひつきました。

兵士『囚人馬車に近付いてはいけない』

酔拂つた兵士が手を振つて制するのを見向きもしないで、ネフリユドフは馬車から飛び下り、クリルツコフに寄り添つて歩き出しました。昨夜見た時に比べると、けッそりと痩せ、眼ばかり大きく光つてゐる。

ネ『容體は何うです』と訊ねられると、眼をつぶつて、首を振るばかり。しかしばらくすると口を覆うてあつたハンケチを取りのけて、

ク『今は大變具合が宜しいです。風をひきさへしなければ……時に三體の問題は何うなりました。解答はむづかしいですか』

殆ど聞きとれないくらゐな低い聲で、淋しく微笑しながら言つたが、ネフリユ

ドフには何の事だか分らない。すると、クリルツヲフの馬車に乘つてゐたマリヤが、

マ『それは貴方とカチューシャとシモンソンの問題を言つてゐるんですよ』

クリルツヲフは『さうだ』といふやうに頷いた。

ネ『さうですか、その解答は私のすべきものぢやありません』

マ『手紙は屆きまして？盡力して下さいますか？』

ネ『確かに受取りました。出來るだけやつて見ませう』

病人が不快な顏をしましたので、ネフリユドフはその傍を離れて又た馬車に乘りました。それから十町あまりも走らせると、シモンソンとカチューシャが何か話をしながら歩いてゐるのが見えた。シモンソンはネフリユドフを見付けてお辭儀をしましたが、ネフリユドフは馬車を留めなかつたので、直きに彼等を追ひ越してしまひました。

次の町へ着くと、ネフリユドフは土地で一番のホテルへ投宿し、久しぶりに露西亞風呂へ這入つて、それから此地方の知事の官舍へと乘り込みました。

知事といふのは、でぶ〳〵肥りの元氣さうな將軍。韃靼絹のガウンにくるまつて、葉卷をくゆらしながら、銀臺のコップで茶を啜つて居た。

知『御機嫌よう。こんな扮裝で失敬します。少し體具合が惡いので引籠んでゐますから』

マ『私は囚人の一隊に從いて來ました。その中に密接な關係のある婦人が居りますので、その婦人の爲めやら、他の用件やらで、お目に懸りに參りました』

知『さうですか。それで何ういふ御用件です』

ネ『私の知合の婦人は、マスロワと申す者で、之れは全く寃罪で徒刑の宣告を受けたのです。私は其婦人の爲めに、皇帝陛下へ請願書を捧呈しておきましたが、かの事に就きまして、今月中には何等かの通知が私宛てで當地へ參ることになつて居ります』

知『ははァ、なるほど。それで、他の御用件は？』

ネ『今一つの御願ひは、やはり其一隊に加つてゐる或る國事犯人に就てであります』

知『さうですか！』と意味ありげに頷く。

ネ『その男は重體です――死にかかつて居ります。恐らく當地の病院へ殘されるだらうと存じます。それで女の國事犯人の一人が、一緒に殘つて看護をしたいと申します』

知『緣故の者ですかな』

ネ『いゝえ。しかし結婚すれば一緒に居られると言ふことならば、結婚しようと言つて居ります』

知『とにかく考へて置きませう。名前は何んといふですか？これへ記しておいて

下さい」

尚ほくれ〳〵も詮議を頼んで、ネフリユドフは知事の官舍から郵便局へと馬車を驅りました。

郵便局には、幾通かの手紙や寫替や雜誌が、ネフリユドフ宛に屆いてゐた。局の椅子に腰をおろして、此等の郵便物を檢べ始めましたが、その中で立派な封筒に入れて封蠟で嚴封した書留郵便が第一に目についたので、ネフリエドフは封を切つて讀んで見ると、舊友のモレーニンといふ檢事から、マスロワの請願に就て通知して來たのでありまして、その中に同封した公文書の寫しによりますと、請願が首尾よく聞き屆けられて、マスロワに對して減刑の恩命が下つたといふことが分りました。此吉報に接したネフリユドフの喜びは如何ばかりでありましたらうか。それは讀者の想像に任せておきます。

三六、新生活の曙光

吉報に接したネフリユドフは、喜び勇んで州廳へ馳けつけ、マスロワの減刑命令の原本が到着してゐるかどうかを問合せると、まだ着いてゐないといふ返事。そこで一旦ホテルへ引返し、夕刻から又た知事の官舍へ出掛けた。といふのは、知事から晩餐の招待を受けて居ります。

途々、ネフリユドフは、カチユーシヤが減刑の通知を受取つて何う思ふだらうと思案し始めました。カチユーシヤは何處で暮すだらう？自分は彼女と一緒に暮したものかしら？シモンソンの事は何うしたものだらう？二人の關係は何うなつてゐるのだらう？

『まあ、可い。その時が來れば分るだらう』と、ネフリユドフは考へ事を心から追ひのけて、知事の晩餐に列席いたしました。

長い間不自由な生活を續けて來たネフリユドフには、此晩餐が非常に愉快であつた。此席上には將軍夫妻とその娘の他に、英國人が一人と鑛山に關係してゐる男と、シベリヤの或町の町長と、知事の副官が列席して居りました。いづれも親切な愉快な人々で、ネフリユドフと知り合ひになつたことを喜んでゐる樣子。いろ〳〵とネフリユドフに話しかけます。中にも英國人は頗るの話上手で、四方八方の話の末に、

英國人『將軍、私は寺院や工場は大抵見物して來ましたが、まだ監獄を見ません特別に視察を許して戴きたいものです』

知『おう、それは丁度宜い。ネフリユドフ公爵も監獄訪問を希望して居られる。お二人に通券を上げなさい』と副官に吩咐ける。

ネ『何時お出掛けになりますか』

英『今晩行きたいと思ひます。囚徒の生活を有りの儘視察することが出來ますか

ら』

知『ははア、最も光彩を放つてゐる所を見たいと仰やるんですな。さうなさるが宜しい』

ネフリユドフは英國人と連れ立つて監獄を訪問する約束を致しました。

食事が濟んで、コーヒーになると、ネフリユドフは英國人を對手に又た一しきり談話を試みた。それから知事夫人は英國人の所望で、ピヤノの所へ行つて、ベートーヴエンの何かを彈き始める。久しぶりにうまい御馳走を食べ、上等の酒を飲み、安樂椅子に凭つて、コーヒーを啜りながら、名曲を聽いたんですから、ネフリユドフはまるで生きかへつたやうな心持ちが致しました。彼は自分が善人であるのを始めて悟りでもしたやうに、ゆッたりとした氣分になりました。こんな事は久しい間ネフリユドフにはなかつたのであります。

やがて、ネフリユドフと英國人は、一家の人々に今夜の厚意を謝し、別れを告

けて女關を出る。いつの間にか天候が變つて、大片の雪が降りしきつて居ります。

監獄へ着いて通券を見せると、典獄は二人を事務室へ案内して、椅子をすすめながら、用向きを訊ねる。

ネ『私は女囚のマスロワに面會したいのです。此處に居られる英國人の方は、監獄制度を視察に來られたのです』

典獄は押丁を呼んで、マスロワを連れて來るやうに命じ、それからネフリユドフの通譯で、いろ〳〵英國人の質問に答へる。ネフリユドフも飛んだ所で偉い役目を仰せつかつたもの。早くカチユーシャに逢ひたいと思つてゐますから、通譯なんかは全く浮の空です。その中に廊下に足音がして、扉を開くと押丁がカチユーシャを連れて這入つて參りました。

ネフリユドフは二三歩進んでカチユーシャを迎えた。

ネ『減刑になつたぞ。請願が聞き屆けられたぞ』

カ『只今看守さんがその事を知らせてくれました』

ネ『で、命令書の原本が着き次第、何處か住む場所を定めて差支ないのだ。一つお前とも相談して……』

カチユーシャの顏色は蒼くなつた。

カ『何の相談ですの？私、シモンソンの行く所へ從いて行きます』

ネ『うむ、さうか』

ネフリユドフは、これより外に返事が出來ません。

カ『あなたも御存じの通り、シモンソンは私と一緒に暮したがつて居ります……私を自分の傍に置きたがつて居ります。私として、それが出來れば幸福と思はなければなりません。それ以上に何を望みませう？』

かう言つて、カチユーシャは目を落しました。

ネ『それで、お前はあの人を愛してゐるのか』

カ『そんな事を訊いて下さいますな。後生です。何もかも運命ですわ。ドミトリさま、勘忍して下さい……』

カチューシャの目には、涙の露が宿りました。

ネ『何も勘忍なんて言はないでも可い……私はお前の幸福を祈る。お前が、お前が、シモンソンと一緒に暮すのが幸福ならば、それに越した事はない。私はお前達の幸福を祈るよ……』

カ『ドミトリさま。いろ〳〵御厄介をかけました。どうぞ、お體をお大事に遊ばして、世の中の爲めに、同胞の爲めに盡して下さいまし』

カチューシャはもッと何か言はうとしましたが、聲が慄えるので止して了つた。

ネ『いづれにしても、お前から禮を言はれることはない』

カ『ドミトリさま、何事も神さまのお考へで御坐います。神さまが私達の勘定を纏めて下さいます』

ネ『……おお、カチューシャ。お前は何といふ善良な女だ！』

カ『私が善良ですッて？』

カチューシャは涙を咽んだ聲で言つて、淋しく微笑しました。

ネ『御用はお濟みですか？』

ネ『ええ、今直ぐに。それからカチューシャ。あの人の病氣は何うだ。クリルツフさんの？』

カ『先刻治療所へ送られました。マリヤさんが大層心配して、看護婦となつて附いて行かせてくれと言ひましたけれど、とう〳〵許されませんでした。お連れの方がお待ちのやうですから、私、お暇しませうか？』

ネ『私は左樣ならとは言ひ度くない。カチューシャ、また逢はうね』

ネフリユドフは握手を求めました。

カ『御免下さい』

と、哀しげな微笑を浮べながら言つて、カチユーシャはネフリユドフの手を握りしめましたが、直ぐと踵をめぐらして、室を出て行つて了ひました。

ネフリユドフは出て行かうとしたが、英國人が何か書き留めてゐるのを見て、壁際の腰掛に腰をおろした。激しい疲勞が俄かにネフリユドフを襲つた。彼は腰掛の背にもたれて、眼を閉ぢると、その儘ぐッたりと寢込んでしまつた。

『さあ、監房を御覽なさいませんか』

典獄の聲にネフリユドフは眼を覺と、自分のゐる場所に氣が付て吃驚しました。

ネフリユドフは英國人と一緒に事務室を出て、監房を視て歩きましたが、終ひに、とある扉口の前へ來ました。

英『此處は何ですか？』

典『死體の置場です』

英『ほう。一つ中を見度いものですが——』

典『這入つて御覽なさい』

死體の置場は、普通の監房と同じ構造でありました。壁に吊した小さなランプが寢臺棚の死骸を朧げに照してゐる。四つの死骸の中で、一番手前にあつたのは粗末なリンネルのシャナと下ヅボンを着けた丈の高い男。ちよんびり顎髯を生やして、頭を半分坊主にしてゐる。その死骸はもうすッかり硬ばつてゐる樣子。その隣りには足も頭もむき出しのお婆さんが横はつてゐる。白のスカートに白のジヤフツを着て、皺だらけの黃色い顏をして、鼻をとがらせてゐる。その向ふにライラック色の着物を纏つた今一ツの男の死骸が轉がつてゐる。この色——ライラック色は——ネフリユドフに舊い或る記憶を喚び起させました。ネフリユドフが始めてカチユーシャと接吻したのは、ライラックの花の咲き亂れた藪の蔭ではありませんでしたか。

きりッとした形の好い鼻、高い白い前額、縮れた髪——それはネフリユドフに

は見覺えのある顏でありましたが、彼は殆ど自分の眼を信じることが出來ませんでした。ネフリユドフは今朝此顏の持主から、『三體の問題は何うなりました。解答はむづかしいですか』と尋ねられた。今やその解答は——出來た。さうして此質問を發した人は、彼自身の人生の解答を得たでありませうか？

それは申す迄もなく、青年革命家クリルツヲフの死骸でありました。

氣の遠くなつたネフリユドフは、英國人にも別れを告げずに、外へ出て、馬車を驅つてホテルへ歸りました。しかし、寢床へは這入らずに少時は室內を往つたり來たりして居りました。

カチユーシャの爲めに彼の爲すべき仕事を終りを告げ、今や彼は不要の人であります。けれども、彼の今一つの仕事は未だ爲し遂げられない。いや、前よりも一層彼の活動を迫つてゐる。近頃になつて分つて來た色々の邪惡、非道、親愛なる青年クリルツヲフの生命を奪つたところの此邪惡非道は、世の中を我物顏には

びこつてゐるではありませんか。

歩き疲れ、考へ疲れて、ネフリユドフはランプの傍近く長椅子に腰をおろし、先刻英國人が紀念にくれた聖書を器械的にめくつて、ところ〴〵を讀み耽つてゐる樣子でありましたが、少時すると、彼は突然に高く叫びました。

『してみると、これだけの事なのか？さうだ！これが人生の總てなのだ！吾々は自分の生活を支配するものは自分であると思ふならば、又た人生は享樂の爲めに與へられたものであると考へるならば、それは大なる誤りである。吾々は或者の意志によつて、或目的の爲めに此世の中へ送られたのだ。ところが、吾々は、自分の生きるのは自分自身の享樂の爲めだと思ひ込んでゐる。「天國と神の正義を求めよ。總てのものは從つて得らるべし」さうだ！吾生涯の任務は玆に在るのだ。一つの仕事が終らぬうちに、別の仕事が出て來る』

其夜はネフリユドフに取りまして、新生活の曙でありました。彼は自分の爲

めに墮落し、自分の爲めに獄裡の人となつたカチユーシヤを救ひ、自分の過去の罪業を償はうとして、地位を捨て財産を捨てゝ、カチユーシヤの爲めに盡した。その効果が現れて、カチユーシヤは立派な人間になつた。しかし、其結果彼は戀人を失つた。それを一時たりとも不愉快に思つたのは、彼が人間としての眞の使命を悟らなかつたからである。しかし、今や彼の前には新しい世界が開けた。その世界に於て彼は更に大なる、更に高貴なる使命を果たさなければならない。

ネフリユドフは希望と自信とに充ちて、安らかな眠りに落ちたのであります。

西洋講談『戀のカチユーシヤ』永々御退屈でありましたが、之を以て結末といたします。終りに臨んで、演者は、此古今の名作を汚した罪を、謹んで、トルストイ先生の靈に謝するのであります。

戀のカチユーシヤ　終

大正十年五月十七日印刷
大正十年五月二十日發行

著者　小田律
發行者　仲摩照久
東京市麹町區山元町一ノ三

戀のカチユーシヤ

定價八十五錢

印刷者　太田高次郎
東京市麹町區永田町二ノ三〇

發行所　東京市麹町區山元町一ノ三
電話九段二六二六・振替東京四三二四〇
新光社

西洋講談

毎月一冊宛續刊
最新型約四百頁
定價金八十五錢
送料 十三錢

飛如行賣

第一編 幽靈夫人 既刊

佛國探偵小說界の驍將モーリス、ルブラン先生の傑作巴里の熱血青年と伯爵令嬢の火の如き戀を中心として獨逸軍事探偵の傍若無人の活動を描けるもの探偵あり活劇あり近來の好讀物。

第二編 戀人の罪 既刊

怪賊ルバンとキエリ名探偵の一大活劇を中心として、絶世の怪美人と怪漢ルバンの戀物語を描いたもので等しくルブラン先生の傑作、第一編幽靈夫人を讀んだ人は是非共又必讀すべき書である。

□新光社發賣好評圖書□

長谷川善作著 **商用手紙大鑑**（十版） 定價一圓六十錢 送料八錢

長谷川康涯著 人を引き附ける **座談の秘訣**（八十版） 定價一圓 送料四錢

筒井春香著 最新流行 **隱し藝大全**（百十版） 定價九十五錢 送料四錢

筒井春香著 **愛の文〻籠**（八版） 定價九十五錢 送料四錢

筒井春香著 **浪花節大全**（八版） 定價九十八錢 送料四錢

筒井春香著 性慾研究叢書 **戀愛と性慾講話**（新刊） 定價九十五錢 送料四錢

高橋北堂著 性慾研究叢書 **變態性慾講話**（新刊） 定價九十五錢 送料四錢

羽山常太郎著 活動俳優 **身の上噺**（再版） 定價九十五錢 送料四錢

皇國醫方研究會 **皇國醫方**（再版） 定價九十五錢 送料四錢

英語普及會編 **英語獨學自在**（再版） 特價二圓三十錢 送料十二錢

栃木農業學士著 **蠶の飼方**（三版） 定價九十五錢 送料四錢

□新光社發賣好評圖書□

島田醫學士著 **嫁入後の女の衛生**（四版）定價一圓三十錢 送料六錢

藤波幽堂著 **運勢大辭典**（五十版）特價一圓八十錢 送料六錢

藤波幽堂著 開運自在 **淘宮術秘傳**（新刊）特價一圓五十錢 送料六錢

日本法律研究會編 日常百般 **證文の書き方**（八十版）特價一圓四十錢 送料六錢

日本法律研究會編 **契約の仕方**（五十版）特價一圓四十錢 送料六錢

日本法律研究會編 願屆申請 **願式總覽**（五十版）特價一圓五十錢 送料六錢

日本法律研究會編 民事刑事 **訴訟手續大全**（五版）定價一圓五十錢 送料六錢

米山義兄著 **兵營（須知）**（十二版）定價九十五錢 送料四錢

料理講習會編 **御馳走の拵へ方**（三版）定價一圓二十錢 送料六錢

小野東涯著 **惡筆矯正の秘訣**（三版）定價一圓二十錢 送料六錢

天野雅之著 株式明米 **順天逆三法**（三版）特價四圓五十錢 送料八錢

□新光社發賣好評圖書□

杉本織衛著 **速算的暗算法**（新刊）定價一圓二十錢 送料六錢

加藤朝鳥著 冒險小說 **少年島**（再版）定價一圓五十錢 送料八錢

佐藤「落葉」著 詩集 **あこがれ**（品切）定價五十五錢 送料四錢

佐藤落葉譯 家庭小說 **獄屋の花**（再版）定價一圓五十錢 送料八錢

藤川淡水著 **神樣お伽噺**（再版）定價一圓五十錢 送料八錢

藤川淡水著 **佛樣お伽噺**（再版）定價一圓五十錢 送料八錢

小野政方著 **母樣論**（再版）定價一圓八十錢 送料八錢

上村知清著 **米國旅行案內**（三版）定價二圓五十錢 送料八錢

服部瀞夫著 **大本教の批判**（十版）定價二圓 送料八錢

谷口正治著 **皇道靈學講話**（四版）定價二圓五十錢 送料八錢

池澤原治郎著 **謎の大本教**（三版）定價一圓五十錢 送料六錢

□新光社發賣好評圖書□

橘金太郎譯 露國廢帝虐殺の眞相（新刊） 定價一圓八十錢 送料八錢

勞資研究會編 勞働問題講演集（再版） 定價二圓三十錢 送料十二錢

世界少年編輯部編 中等學校入學受驗準備書（再版） 定價五十錢 送料四錢

世界少年編輯部編 中等學校入學受驗準備號（再版） 定價六十錢 送料四錢

世界少年編輯部編 全國中等學校算術入學試驗問題と模範答案（再版） 定價六十錢 送料四錢

世界少年編輯部編 全國中等學校談方入學試驗問題と模範答案（再版） 定價六十錢 送料四錢

世界少年編輯部編 全國中等學校綴方入學試驗問題と模範答案（品切） 定價六十錢 送料四錢

世界少年編輯部編 地理歷史理科入學試驗問題と模範答案（再版） 定價六十錢 送料四錢

森田義郎著 革命的心自强健法調精術（品切） 定價一圓五十錢 送料六錢

森田義郎著 護身征復氣合術（品切） 定價一圓二十錢 送料六錢

岡田伊之助著 肺病十大根治療法（再版） 定價一圓五十錢 送料八錢

389
49

終